

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2012

4

ISSN 1340-8917



特集 ■ 「日本で最も美しい村」に学ぶ

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



特集

「日本で最も美しい村」に学ぶ

- | | | |
|--------------------------------|--|-------|
| 4 「愛郷心」で村と都市を結ぶ | 佐藤 誠 (北海道大学観光学高等研究センター 特任教授 「日本で最も美しい村」連合資格審査委員) | |
| 8 北海道標津町 大自然に囲まれキラリと光る町並み | | 山田弘次 |
| 10 北海道黒松内町 ブナに囲まれた田舎を創造する | | 新川雅幸 |
| 12 秋田県東成瀬村 自然と文化の融合体「仙人郷」 | | 佐々木哲男 |
| 14 群馬県昭和村 〴〵ベジタ Full ガーデン 昭和村、 | | 梶山友則 |
| 16 長野県木曽町 御嶽山、木曽馬などの地域資源活かす | | 木村恭一 |
| 18 長野県高山村 農山村の原風景が残る山里の魅力 | | 島田 誠 |
| 20 岐阜県東白川村 東白川を後世に残すために | | 河田 孝 |
| 22 奈良県曽爾村 豊富な自然資源活かし観光に注力 | | 森澤英之 |
| 24 高知県本山町 米のブランド化で棚田を守る | | 大西千之 |
| 26 大分県由布市 歴史とロマン溢れる景観と環境保全 | | 伊東靖彦 |
| 28 宮崎県高原町 景観や環境・文化を守る活動 | | 岸元誠樹 |
| 30 沖縄県多良間村 古琉球王朝時代の面影を追って | | 垣花 剛 |
| 32 美しい日本の風景や文化を守り、後世に伝えるために | 観音太郎 (NPO 法人「日本で最も美しい村」連合事務局 美瑛町ブランディングプロジェクト東京本部) | |

レギュラーレポート

- 地域づくり団体探訪
- 36 NPO 法人 自然回復を試みる会 ビオトープ孟子
里山自然を活かした地域活性化 和歌山県海南市
- 38 地域トピックス 栃木県宇都宮市
まちのティールームが街づくり大学に 吉野清史
- 44 平成 23 年度地域再生実践フォーラム
日本再生の担い手は地方に存在 財団法人地域活性化センター
- 46 首長の思い
「こでええまち」を目指して 穂積 志 (秋田市長)

40 センター通信

グラビア

- 2 「日本で最も美しい村」に学ぶ
- 第 16 回ふるさとイベント大賞表彰式・
41 平成 23 年度地域再生実践フォーラム開催
- 47 都道府県漫遊 【岡山県】
- 48 手前みそですが… 【滋賀県長浜市】



一面に広がる芝桜の中を散策

秩父市街地を一望できる羊山公園は、桜の名所として知られる。芝生広場や見晴しの丘には、ソメイヨシノ、シダレザクラが約1000本植えられ、4月上旬の見ごろを迎えるとお花見客で賑わう。

平成12年から、南の一角に芝桜を植栽し、「芝桜の丘」が誕生した。約1万7600平方メートルの敷地に、9種類、約40万株の芝桜がデザイン化して植えられている。

そのデザインは「秩父夜祭」の山車に乗る囃し手の襦袢模様と躍動感をデザイン化したもの。満開の時期は、ピンクや青、白、紫色の色とりどりの芝桜が一面、花の絨毯のように見える。

羊山公園は、親子の羊がのんびり暮らす「ふれあい牧場」元気がいっばいに遊べる「芝生広場」、アスレチック遊具のある「わんぱく広場」、「牧水の滝」など、お花見と散策が楽しめるスポットである。

(写真提供：秩父市観光課)

羊山公園「芝桜の丘」

表紙

(埼玉県秩父市)

選ばれる都市くまもとに向けて

熊本市長 ● 幸山政史



熊本市は、人口73万人を擁し、熊本城に代表される伝統ある歴史・文化や豊かな自然に恵まれた快適な都市機能と併せ持つ、九州中央の交流拠点都市です。

昨年3月に九州新幹線が全線開業し、さらに、本年4月1日には政令指定都市へと移行するなど、本市は今、まさに歴史的な転換期を迎えており、この好機に更なる飛躍を遂げるべく、昨年2月に策定した「挑戦元年アクションプラン」のもとに、新たなまちづくりを進めているところです。

このアクションプランは、本市が将来にわたって発展し続けるための事業内容やスケジュールを具体化したものであり、3つの「再デザイン」に取り組むこととしています。

1つ目は、「市役所の再デザイン」です。

政令指定都市への移行を契機に設置される区役所をはじめとする組織の再デザインを行い、協働のまちづくりを推進することで地域の特色を更に引き出していきたいと考えています。また、全国でもトップクラスの産出額を誇る農水産業において、食品加工業をはじめとする商工業との連携強化を図るなど、都市戦略力の向上にも努めてまいります。

2つ目は、誰もが気軽に公共交通を利用できるようにするための「交通体系の再デザイン」です。

駅・港・空港といった広域交通拠点とのアクセス強化や、スマートインターチェンジの設置、さらには、既存のバス路線の見直しに加えて、区バスや住民バス・デマンドタクシーなど多様な交通手段を組み合わせることで、公共交通の利便性向上と九州各都市との連携強

化を図ります。

そして、3つ目は「中心市街地の再デザイン」です。

コンベンション機能の充実のはじめ、民間主導で計画されている花畑・桜町地区再開発の支援、両地区に狭まれた道路の完全歩行者空間化、熊本の陸の玄関口である熊本駅と中心市街地を結ぶ地域での城下町の風情溢れるまちづくりなど、人々が楽しめる機能が集積した交流空間の創出に取り組んでまいります。

さらには、保育園の待機児童ゼロを目指した取り組みや、地域経済の活力の源となる中小企業の振興、熊本の文化芸術を支える担い手の育成など、ソフト・ハードの両面から、都市機能の充実と市民サービスの向上を図ってまいります。

本市では、九州新幹線的全線開業以来、関西方面を中心に観光やビジネス等で多くの方々にご来熊をいただいておりますが、今後は新たに拡充される権限と財源を最大限に活用し、熊本の特性を活かした魅力あるまちづくりを進めることで、国内外における本市の拠点性をより一層高めてまいりたいと考えており、指定都市移行を契機として、九州全体の発展に「貢献できる都市」、全国から東アジアから「選ばれる都市」、そしてもっと暮らしやすさを実感できる「日本一暮らしやすいまち」の実現を目指してまいります。



「日本で最も美しい村」に学ぶ



特産物手づくり加工センター「トワ・ヴェール」周辺の牧歌的風景

● 北海道黒松内町 (p10-11)



季節の花々が美しい町内の風景

● 北海道標津町 (p8-9)



赤城山の麓に広がる河岸段丘

● 群馬県昭和村 (p14-15)



肴沢上空からの遠景

● 秋田県東成瀬村 (p12-13)



農山集落と山並みが調和した景観

● 長野県高山村 (p18-19)



御嶽山をバックに戯れる木曽馬

● 長野県木曽町 (p16-17)



ススキで覆われた曽爾高原、3月中頃には山焼きが
● 奈良県曽爾村 (p22-23)



新緑の中で行われる茶摘みの様子
● 岐阜県東白川村 (p20-21)



緑豊かな雄大な山々に囲まれて集落が広がる
● 大分県由布市 (p26-27)



ブランド米の生産地である「棚田」は観光拠点にも
● 高知県本山町 (p24-25)



上空から見た多良間島と一周道路
● 沖縄県多良間村 (p30-31)



霧島山「高千穂峰」と御池
● 宮崎県高原町 (p28-29)

「愛郷心」で村と都市を結ぶ

―ネオ・ルーツリズム時代のなりわい興し―

美しい村のグローバルな連携

2010年9月、イタリアのサンジェネズイオ村で催された《第1回「世界で最も美しい村」連合会フェスティバル》を舞台に、フランス・イタリア・ベルギー・カナダと並んで「日本で最も美しい村連合」は、世界連合会への正式加盟が承認された（写真1…調印式典）。日本から、浜田哲美瑛町長（連合会長）・松尾雅彦元カルビー社長（同副会長）以下、自治体首長やサポーター企業トップをはじめ教授・学識経験者や大鹿村歌舞伎の演者たちも祝祭を盛り上げた。

1982年に創設された「フランスで最も美しい村連合」（加盟数152村）の成果に倣って、94年「ワローニア地方で最も美しい村連合」（ベルギー24村）、97年「ケベック州で最も美しい村連合」（カナダ32村）、2001年「イタリアで最も



北海道大学観光学高等研究センター特任教授
「日本で最も美しい村連合」資格審査委員

● 佐藤 誠

も美しい村連合」（約160村）、2005年「日本で最も美しい村連合」（44町村・地域）と連合が設立され、併せて国境を越えた連携の輪が広がってきた。オーストリア、ドイツ、ロシア、ルーマニアや東欧諸国の他に、アジアの韓国、台湾などで設立の機運が高まっている。

国によって、加盟村の人口規模は2000人以下などまちまちだが、存続の危機を迎えた小さな村が国民の「愛郷心」に訴えて地域資源を磨き、その景観などのアメニティ資源に惹かれる来訪者・移住者と協働して、自然に活かされるグリーンライフや伝承ある暮らしを守りながら、現代的な地域産業の振興に取り組んでいる。

フランスで最も美しい村の
アソシエーション

レーズ州コロンジュ・ラ・ルージュの村長であるシャルル・セイラック氏は、自分達の村が過疎

化しているために無秩序な開発から免れており、その伝承による資源価値を磨けばツーリズム産業を興えることに気が付いた。

観光業界から無視されてきた村の発展や改善を支援し、組織的な情報発信をするために、彼はそれらの村を「フランスで最も美しい村連合」(Association Les Plus Beaux Villages de France)として、連携事業を興そうと決心した。彼は自家用車で全国を回り、献身的に、22の村を組織した。30年前のことであった。

小さなコミュニティ（自然村）は存続自体が困難であればこそ、村同士で切磋琢磨してそれぞれにオンリーワンの魅力を磨くツーリズム振興策に共感の輪が広まっていった。住民自らが足元の伝承文化や自然資源の価値に気づき、その誇りを「最も美しい」との名乗りで表現し、愛郷心による地域活性化を図ろうとした。事業は発展し、将来的には240にまで加盟村を増やす予定である。

住民が2000人以下であることを基礎条件に、加入資格の基準は厳格で、27の項目から成る。そのいくつかを挙げれば、価値ある景観や遺産など複数の資源があること、建造物や集落に秩序があり、景観や環境への公的規制があること、地元の行政から商店主、住民まで村をすばらしいものにしたという共通の意思＝愛郷心を有していること、などである。

登録コミュニティは、連合の「質に関する認証書」に従わなくてはならない。連合は自治組織であり、基準厳守を加盟村に要請し、専門家や幹部村長達が改善を勧告し開発指導を行う。5年に一度、それぞれの村が加盟時の価値を維持・発展させているかどうか、指標ごとに客観評価を行い、基準を満たしていない場合には加盟を無効にする。

こうした自律的なコミュニティの連携事業は、多



写真1：加盟調印式で強い絆の握手（フランス・イタリア・ベルギー・日本の会長たち）

様な企業からの支援を誘発した。フランス電力は、電線の地下埋設や景観を損なわない偽木電柱の開発に協力し、リーダーズダイジェスト社は大判のガイドブックを刊行した。

ツーリズムの国際的認証機関でもあるミシエラン社が、「美しい村マップ」を大量に配布しブランド価値の評価を確固たるものにした。

連合の認証評価が社会的に支持されたことから、加盟村には三ツ星のレストランやホテル、世界的ブランドを持つブティック等が進出し、質の高いツーリストの入り込み増と共に、近年では世界中からのセカンドホームツーリストや移住者が激増している。また、フランス政府はインバウンド政策として“Come To France Come To Paris”キャンペーンを展開したが、このキャッチコピーでの海外旅行者の招致を許されたのは、パリ市と連合加盟村のみであった。

多くの村に瀟洒な不動産屋が立地し、パリよりも高価な不動産物件が、店頭写真で世界中の田舎暮らし希望者の購入意欲をそそっている（写真2…店頭での物件紹介）。価格急上昇に伴う固定資産税の増額や家賃の高騰が社会問題化するほどである。

移住した英国人ピーター・メイがベストセラーで、人間臭い田舎暮らし人気を高めた。ツーリストや移住者の激増は様々な職種のなりわいや産業を地域で産み出している。例えば、プロバンスに位置する、ソルグという人口4000人の水郷の村には、何と500軒ものアンティーク店（写真3…アンティークショップ）が立地し、週末には数百もの露天出店が並び、数万人の観光入込客



写真3：伝承ある暮らしを子供も継ぐ（水郷ソルグ村のアンティーク店も移住者が経営）



写真2：小さな村の不動産屋での物件（パリのマンション・豪邸よりも高価なもの）

を数え、その賑わいには驚ろかされる。

当然のことながら、コミュニケーションの中では、レストランやB&B、ブティックや特産品開発などの各種様々ななりわいが興っている。何故アンティークかといえば、古家再生で億単位の民家を購入する移住者たちが、家具や什器をそろえようとする需要があるからだ。

さらに、厳しい都市計画で縛られたコミュニケーションの周辺地域では、都市からの移住者たちが田園ガーデニングライフを享受し、そのハウジングやガーデニングに関わるビジネスも、村の経済を活性化させる。都市市民から選好されるコミュニケーションはホットスポット的に繁栄している。

ネオ・ルーラリズムと アメニティ・ムーバー

欧米諸国では、1980年代から、田舎暮らしブームが始まり、高速情報・交通ネットワークが整備された90年代には、セカンドホーム・ツーリズムや田園移住が一般化してきた。

「伝承なき生活 それは人生の廃墟だ」(バラニャック)と感じ、田園でグリーンライフを実現したいと望む都市生活者の心に響く、アメニティ・リッチな魅惑の生活空間のステータスは高く、国内外からアメニティ・ムーバーが殺到している。いのち豊かなライフスタイル実現に関わる、健康や美・伝承文化・リアルエステートやハウジング等などのライフスタイル産業が、地元住民との協働で創造されている。

これまでの観光やリゾートではない、暮らしといのちを輝かす次世代型のツーリズムが、田園を

舞台に、21世紀のライフウェア産業(注1) 勃興をもたらしている。

村は、単に食料や木材というハードウェアを産み出す一次産業の場ではなく、景観や環境や伝承文化というソフトウェアを、村人と都市生活者とが共有する資源価値として活かして、いのち豊かなライフスタイル産業の孵化場となる。

例えば、アメリカ合衆国では90年代に220万人が都市から田舎に移住している。移住先はカナダの南方、ロッキーマウンテン脈の西に位置するマウンテンウエスト8州が中心である。

大自然のパノラミックなランドスケープが選好され、アメニティ・リッチな田舎へ、当初は社会的成功者や金持ちの引退者が、続いてアメニティ・ムーバーと称される高学歴・高能力の若者が移住し、現代的暮らしのニーズにあったライフスタイル産業を起業している。

19世紀末に見られた、ラスキンやモリスらの知識人の「田舎好み」(オールド・ルーラリズム)と区別される、なりわい興しに根をもっている「ガーデン・ビレッジ選好」(ネオ・ルーラリズム)が21世紀の特質と言える。

英国ではレック・ディストリクトやコッツワルド、フランスではプロバンス、イタリアではトスカナ、ドイツではシュバルツバルト、スウェーデンではスコーネ、アメリカではマウンテンウエストなどの地域で顕著だ。

日本でも土地に根差した 「なりわい興し」をやるう

日本でも始まった、草の根ネットワークの構築

は、加盟自治体サイドの努力もさることながら、企業会員の力量に負うところが大きい。特定非営利活動法人「日本で最も美しい村」連合の平成23年度の経常収入は僅か1200万円にすぎない。

自治体から約400万円、大手企業を中心に45社の一口(10万円)以上の年会費の正会員企業から520万円、加盟自治体に立地するローカル企業・団体114社および個人会員で構成する372の準会員から230万円、合せて会員収入が150万円に対して、事業収入はまだ40万円程度にすぎない。

全国・世界規模での価値ある運動・事業は、到底こうしたNPO予算で賄うことはできず、参加者のボランティアな負担に頼っている。とはいえ、サポート企業は東京事務所を提供し、資格審査や各種イベントに人手を投入し、ロゴマークやカレンダーの制作、会議室提供・事務補助、海外・国内出張などなど、自治体や地域住民の努力や働きに負けない活動で事業を推進している。

海外の連合と比較して、わが国の企業がふるさと振興へよせる内実の貢献度ははるかに大きい。

村の消滅は、一国の存続基盤が消えることを意味する。「ムラのいのちを都市の暮らしに、都市の力をムラのなりわいに」めぐらせ、国の持続に向けた、一人一人の愛郷心の発揮が求められている。

ちなみに、お隣の韓国では、政府の音頭で、結びつきの形は問わず、「旧い」村と都市で発展した「新しい村」である企業とが縁を結ぶ「一村一社結縁運動」が盛り上がっている。

わが国の大都市住民の約4割以上に、田舎暮らし

し志向性が見られる。これから先、都市の企業や行政に雇用増大を期待できない。雇用ではなく「なりわい」創出が国民的課題であらう。大地に根差したなりわいを、少額投資で興せる場所は田舎である。

美しい村で産業イノベーションを

わが国での取り組みの端緒は、平成の大合併に飲み込まれずに、自律の地域振興をめざそうという熱い思いで一致した、美瑛町長とカルビー社長の出会いにあった。

グリーンライフ実現をめざす住民・行政・企業の市民的連携による田園リゾート建設を願ってきた筆者は、お二人の情熱に共鳴した。明治以降三度あった合併で、6万5千の自然村は内実を喪いつつ、2000を割る「自治」体に飲み込まれ、暮らしの自給システムやなりわいが消えつつある。

以下は個人的見解だが、フランスのような事業を、より緊密な企業と地域との事業連携で地域再生の新産業興しにつなげたいとの願いがある。

フランス連合は、4万8千のコミュニンの0.5%に相当する240村連携をめざしている。わが国でも、0.5%相当の300ほどの大字単位の自然村を、起業家の力をお借りして、経済的に実効性が高い新産業創造の場所として蘇らせた

い。

整備済みの高速情報・交通網を活かして、農林水産物の流通で都市と農村が結びつくだけでなく、いのちと暮らしを輝かしあう共通のふるさと

再興と、なりわい興しの連携事業へと進化・発展をめざせないだろうか。感動的な出会いと共生によって、なりわいやライフウエア産業を興す孵化機構として、「最も美しい村」アソシエーションの進化・発展を望みたい。

筆者自身、暮らしの自給、とりわけ健康の自給をめざして、「ガーデンナー」(注2)として、自分の「なりわい」興しを目下準備中である。この春から阿蘇に移住し、パノラミックな景観に身を置き、ラオスやフィンランドの伝承を活かしたハーバル・スチームサウナを軸に事業を興す。

「ファーマー」になろうとは思わないが、健康増進ビジネスを起業し、〆ピンピンコロリ〆をめざす。縁で結ばれた世界の村人や支援企業とのつながりを活かし、なりわい創造のライフスタイル起業家を育ててみたい。

とりわけ、六次産業化法の流れで、本年度に創設される、一次産業をベースとした新成長産業創出に関わるファンド事業に期待している。地域の農業者・団体と六次産業化パートナー企業との連携事業体に、財投資金や金融機関の新たな資金が投じられる。地域資源を活かす住民・行政・企業・大学の連携事業を、都市と農村の新結合＝産業イノベーションで興したいものである。

これまで、市民の農地アクセスが不当に制限されてきたが、農地法改正でリースなら農地が使えるようになった。地域での暮らしから隔離した別荘やボロ古民家購入でしか叶えられなかったグリーンライフ実現を、新構想の「ガーデン・ビレッジ」のガーデンナー起業で果たそうと思う。美しい村こそ、その舞台にふさわしい。

注1: 「ライフウエア産業」とは、台湾生産性本部の張総経理が、小生の論考から導き出した概念。

シュンペーターのイノベーション論を、生産諸要素の「新結合」(Neue Kombination)と捉えなおした。19世紀の資本主義が、土地・資本・労働力の新結合でハードウエア産業を産み出し、20世紀末のマネーインダストリーが、情報・コンピューター・金融工学の新結合でソフトウエア産業として勃興を見たが、ポスト・バブルの21世紀には、美しい土地・伝承文化・感動の出会いが新結合されて、ライフウエア産業が勃興すると論じる。

アメニティ・ムーバーと村人との感動の出会いから、ライフスタイル・イノベーションが生じる。21世紀はそうした意味で、アメニティ・リッチな田園で、文化や産業が風土から生まれる、「ガーデン・ビレッジ」の時代となろう。

注2: 農業は欧米では二つの範疇に分かれている。市場へ農産物というハード商品を提供するファームینگと、生き様と関わっての暮らし自給のガーデンニングとに。両者を分かち合える2ヘクタール面積区分である。ガーデンナー志向やグリーンライフ実現がライフスタイル起業を促す。村の再生と、農業再構築の可能性とはライフウエア産業の創出にかかっている。

「日本で最も美しい村」に学ぶ

1

北海道標津町

大自然に囲まれキラリと光る町並み ―連合加盟を機に「彩りのあるまちづくり」―



標津町企画政策課 主任

● 山田弘次

標津町は、北海道の最東端部に位置し、根室海峡24キロメートル洋上には北方領土国後島が浮かび、北には世界自然遺産となった秘境知床半島が一望され、その山並みは半島基部を形成する当町の西側背後まで連なっている。また、南にはラムサール条約登録湿地であり、かつ原生花園など四季折々の景勝で親しまれている野付半島を擁するなど、当町は、世界的な景観や自然を有する風光明媚な地域であるとともに、豊かな海と大地の恩恵による鮭・ホタテなどの水産業と酪農業を基幹産業とした「生産の町」である。

当町は、平成19年10月に十番目の加盟町村として、連合への加盟が認められた。海のあるまちとしては、初めての加盟だった。

美しい村連合に加盟したきっかけ

当町は、自然環境との調和を基本としながら、地域性を発揮した特色のある取り組みとして、地域ハサップ（高品質・高衛生管理ⅡHACCP）、

エコ・ツーリズムなどのテーマ性を持った町民との協働事業が活発化しており、他からも高く評価されている。

しかし、すばらしい活動を実践しているにもかかわらず、人口が年々減少しており、改めて自らの町に誇りを持って「心の過疎にはならない」という精神的な充足感・安心感をもとにした「まちづくりへの意欲」を、今一度喚起することが必要と考えていた。

「日本で最も美しい村」連合の取組みを知り、同連合が掲げる目的に当町としても共感し、また、志を同じくするキラリと光る国内の小規模自治体がネットワーク化して、情報交換などを行うことにより、人材やノウハウなどまちづくり活動への刺激が期待できる。

さらに、国内有数の活動や景観をもっている加盟町村の「仲間入り」ができることは、これまで活動してきた町民の喜びや誇りとなり得るとともに、標準ブランドのさらなる向上と知名度のアップにも効果が期待できるものと考え、加盟を

申請したものである。

連合加盟にあたり、審査委員会からは、地域ハサップの実践や体験型・滞在型観光のエコ・ツーリズムへの住民参加など、地場産業（水産業と酪農）や住民ボランティアが観光を牽引する取り組み、漁港の衛生管理（ゴミが落ちていない清潔な漁港）、知床連山や環境と一体となった忠類川サーモンフィッシングの景観、ポー川史跡自然公園の森や湿原と遺跡群などが評価され、改めて地域資源や今までの活動に対する評価を再認識した。

しかし、課題として、一般観光客を呼び込むベースとなるメインストリートの整備や町並み景観（花で飾るなどの美化）整備による、一般観光客を増やす活動について指摘をされた。

町民との協働による景観の取り組み



白い花が咲き誇る蕎麦畑



沿道の花壇とやすらぎ憩いのベンチ



シルバー勤労会による花壇整備

町内景観の創出や町民の花づくり意識醸成に寄与していただいている。

○彩り千本桜植栽事業
彩り千本桜植栽事業は、春の訪れを告げる桜の植栽により田園景観の創出や名所づくり、緑化対策などを町民との協働で実施し、平成22年度～平成24年度までの3年間で合計1000本の桜の植樹

を、豊かな自然と雄大な景観に満足することなく、旺盛な町民のまちづくり意欲を形にしながら「日本で最も美しい村連合」に加盟できた「喜びと誇り」を持ち続け、「海・山・川・大平原がおりなす感動の大地・標津町」の地の利を活かして、「小さくてもキラリと光る」美しい町並み景観の整備に努めてまいりたい。

標津町産業クラスター創造研究会の「光のまちづくりを語る会」や、冬祭りでの光の演出の実証試験などによって、課題提起や実践が行われてきている。

こうした中で、冬の「寒さ」「暗さ」「静けさ」や「白い雪原」のマイナスイメージを「どう地域資源」に変え、「どう標津ならではの冬の彩りを創出」していくか――。町民による検討が芽生えてきた。

春（雪解け）から秋にかけて、沿道のプランターやオーブンガーデンなど花や木々による彩り事業はおきてきたが、冬期間における彩り事業が課題となっている。

標津ならではの冬の彩りを
今後どう創造していくか

を目指すものである。

平成23年度（2年目）には、町内会の名所づくり、子どもの誕生日や会社社の創立記念など460本の交付申請があり、町内各所に植樹された（2年間で760本のエゾヤマザクラを植樹）。これらの取組みにより、日本人の原風景となる「桜の名所」が町内各所に創り上げられることを期待している。

この指摘された課題を克服するため、役場内での各課横断的な連携をはじめ、町並み景観の創造や保全、環境美化の推進を図るため、「沿道の花壇整備」「オーブンガーデン」「彩り千本桜植栽事業」など、町民との協働による「彩りのあるまちづくり推進事業」を実践してきたところである。

このような動きの中で、昔の農村景観であった「そば畑」を復活させた「美しい村標津産蕎麦作り研究会」の取り組みや、当町の名前が品種名となっているジャガイモ「花標津」の普及栽培など、町民主体の活動が起きてきた。

○沿道の花壇整備

花で飾る町並み景観の創出のため、市街地の中心となる国道や道道沿いの賛同いただける商店街や事業所にプランターを貸し出し、手入れや水遣りをお願いする「プランター里親制度」を平成21年度から実施している。

約50の事業所等の賛同を得ながら、115基のプランターを貸し出し、それぞれに、色とりどりの花を咲かせており、景観の創出にもつながっている。また、元気なお年寄りの活躍の場となっているシルバー勤労会が中心となって、沿道や公共用地の花壇整備などの環境・景観創出となり、散策する町民や観光客の目を楽しませている。

○オーブンガーデン

景観の整備や花いっぱい運動の一環として、町民のリーディングモデルとなる愛好者の庭園などを一般町民に開放するオーブンガーデンを平成21年度から開始し、本年度4年目を迎える。

丹精込めて整備されたご自慢の庭園には、色とりどりの花や木々が植えられ、独自の栽培方法によって、大株のベゴニアを1000株以上育てて、赤や黄色の見事な大輪の花を咲かせている愛好者もあり、町内外から多数の見学者が訪れるなど、

ブナに囲まれた田舎を創造する ―ブナ北限の里の資源を守り、育て、活用―



黒松内町企画調整課 上席主幹

● 新川雅幸

黒松内町は人口約3200人、面積345・47平方^{キロメートル}、札幌と函館のほぼ中間に位置する酪農を主体とした農業の田舎^{まち}である。

本連合への加盟を目指したのは、小さくても輝くまちとなる道を選択した本町のまちづくりの理念と、自らの町や村に誇りを持って自立し、美しい地域であり続ける活動を支援する本連合の設立主旨が合致していたからである。

町のイメージアップにつなげ、都市との交流を一層推進するため、昨年に40番目の加盟村となった。

「北限のブナ林」をまちづくりの核に！

町内のブナ林は、昭和3年に自生北限のブナ林として天然記念物に指定。これまで2度の伐採の危機があったが、ブナの学術的な価値の保存を訴えた大学教授と地域住民の嘆願により難を逃れ、現在も本町のシンボルとして多くの来訪者を迎えている。

昭和61年にブナを「町の木」として指定。このころから「樫」ではなく、当てる字で木偏に貴と書く「櫨」を用いるようになり、特産品や交流施設のネーミングに活用するなど、ブナに対する思い入れは一層強いものとなり、都市との交流をまちづくりの基本理念とした「ブナ北限の里づくり構想」において、田舎の象徴に位置付けている。

昭和63年、天然記念物指定60周年を記念して、最初のブナフォーラムを開催した。

平成5年には近隣2町村を加えて2回目を、平成10年には3回目のフォーラムを開催したほか、町民有志による市民劇場「北のヤシの木」が上演された。平成16年には、ブナ林を活かしたまちづくりなど地域の「思い入れ価値」が高く評価され、歌才ブナ林を代表とする「北限のブナ林」が北海道遺産に選定された。

天然記念物指定80周年を迎えた平成20年には、世界各地からブナ林研究の第一人者を招き、歌才ブナ林の重要性や地球温暖化との関係などを解説した講演会をメインに、4回目の国際フォーラム

を開催した。

毎年、新緑の時期だけでなく、冬季には雪国の民具「かんじき」を履いてのかんじきブナウォッシングツアーも開催され、北限のブナ林の魅力を伝えている。また、小中学校授業のブナ林での環境教育、研究者の研究フィールドとしても利用され、今や国内外から「ブナ北限の里」として認知されている。

フットパスの先進地でもあり、ブナ林入口に接する歌才森林公園コースは、エコツアーやイベントを含め年間多くの来訪者に利用されている。北海道洞爺湖サミットでは、気候変動のモニタリングサイトが配置されることが提案されるなど、ブナの北進と動物の生態変化の監視でも重要な役割が期待されている。

このほか、5年前に住民有志による黒松内岳ブナ林再生プロジェクト実行委員会、昨年里山協定



自然体験情報基地「ブナセンター」



フットパス「西沢コース」



天然記念物「歌オブナ林」

を締結した「里山くろまつない・しまむらの森」の取り組みなど、ブナの森を町全体に広げる再生活動も始まっている。

「統一感ある農村景観」を住民との協働で創造

景観の統一化の取組は、平成2年に家庭ごみ集積所の「規格」の統一から始まる。酪農の田舎ということもあり、緑屋根に赤の外壁といった牛舎風のデザインに決定。設置費用の助成制度を設け、現在約9割がこれを採用している。

町が整備する交流施設は、形や色彩に配慮して緑の三角屋根で統一。農村でのランドマークとしての機能を果たせるよう分散して整備し、それらを誘導する看板も小さく目立たぬよう配慮した。

平成7年、景観づくりの基本方針「ブナ里景観ガイドプラン」を策定。平成8年には、景観条例

を制定し、平成12年度から個人住宅も色彩の統一化を奨励するとともに、廃屋・廃自動車の撤去も手がけた。

住宅の色彩配慮は、町の指定色（屋根5色、外壁18色）を定め、奨励金制度を設けて取り組んだところ、家屋の約2割が指定色となり、町並みは20年間で様変わりし、ヨーロッパの農村のような景観が生まれた。平成20年には景観行政団体となり、平成21年に法委任条例、景観計画、法に基づく届出をスタートした。

しかし、統一感のある農村景観の創造には課題もある。「廃屋」がその一つであり、離農や人口減などを背景に約100棟程度まで増えていた。打開のため平成20年度から廃屋を撤去する際の助成限度額を50万円に倍増したところ、過去8年間の合計を大きく超える数の廃屋が撤去されたが、町内不在者の大きな支出への抵抗感も根強くある。そのため、廃屋化しつつあるサイロや牛舎の保全活用に取り組んだ。

これは、本町の統一感のある農村風景には欠かせないポイントとなるサイロと牛舎を産業遺産と

して認定し、利用可能になるまで改修した場合や、周辺の環境整備に対する支援策を盛り込んだ内容を条例制定したものだ。

それとともに、モデル事業として半壊した建物の改修に加え、バイオ浄化設備を整備して自然環境の保全・活用への理解が深められるスポットとなる交流施設を開設。各交流施設を起終点にフットパス4コース（26キロメートル）を結び付け、スローな視点から景観を楽しみ、地元の味を食し、滞在する人の姿を多く見かけられるようになった。

既に5番目のコースを選定してボランティアとの手づくりの整備も予定しているほか、放牧酪農や農作物の無農薬栽培など持続可能な循環型農業にも積極的に取り組んでいくこととしており、町内随所で優れた景観、安全・安心な食、のんびり交流の輪が今後、一層広がることだろう。

ブナの保護だけでなくブナを活かした取組も

20年以上積み重ねてきた「ブナ北限の里づくり構想」に基づくまちづくりは、地域にある優れた自然や農が持つゆるやかな空間などの潜在的な資源と、これまでに築いてきたハード・ソフトの資源により、魅力的で美しい農村空間に変わりつつある。

今後も町民との協働の下、統一感のある農村景観に磨きをかけ、バランスに優れ、趣きのある景観を守り育てるとともに、ブナを保護するだけでなくブナを活かした様々な取組を展開し、本町の意味で、ブナに囲まれた田舎を創造していきたいと考えている。

自然と文化の融合体「仙人郷」 —景観を保全、「仙北道」の魅力を発信—



秋田県東成瀬村長

● 佐々木哲男

「奥羽山脈緑の回廊」の麓^{ふもと}

東北を縦断する奥羽山脈は、岩手県との県境となる。東成瀬村はその西側、秋田県の東南端にある。大陸のシベリア気団から送り込まれる寒気は、日本海で雪雲を乗せて東進し、それが奥羽山脈によってブロックされ、当村は毎年2月を超え豪雪に見舞われる。そのため冬期は、岩手側からのアクセスも途絶え、11月から半年間袋小路の状態になる。

東成瀬村は、明治22年の町村制施行により、田子内村・岩井川村・椿川村の三村から誕生した自治体で、以後一度も市町村合併を経験することなく、平成20年に村制施行120周年を迎えた。

当村は、古くから岩手県とのつながりが深く、「奥羽山脈緑の回廊」にまつわる歴史ストーリーが残り、現在でも文化や観光面で岩手県奥州市との連携が続いている。

先人が守り育てた財産

東成瀬村は、日本海に注ぐ秋田県最大河川「雄物川」の源流域にある。古くから森林と共生してきた地域で、戦前までは良質の木炭生産が盛んだった。特に鉾山精錬用として、昭和初期から戦前まで、地域のエネルギー源であるブナ主体の広葉樹林を「伐って使う」という利活用のシステムが成立していた。

しかしその後、スギ人工林が拡大するにつれ、人と森との共生が希薄となり、森から人が消え、いつしか忘れられた存在になった。

そこで当村は、先人が守り育ててきた広葉樹林の再生を目指すため「水源の森整備保存事業」をスタートさせ、平成3年度から20年で延べ556ヘクタールもの放置天然林を再生した。同時進行で、スギ人工林伐採跡地の天然林化にもチャレンジし、人と森との関わりを再構築するため、各種の体験教室や秋田県森林祭を開催するなど、景観

の保全対策に取り組んでいる。



先人が守り育てた財産

「古のブナ街道」

平安時代初期。日本海と太平洋側を結ぶ主要ルートとして開かれた「仙北道」は、標高1000m以上の急峻な奥羽山脈越える難所の多い街道である。岩手県奥州市から秋田県東成瀬村に至る全長24kmのこの古道には、源義家軍が通った後三年の役（1087年）、また母に再会するため牢獄を脱出した高野長英の帰還ルートとして、さらに隠れキリシタン往来の痕跡が残るなど、様々な人間ドラマが隠されている。

特に近世は、秋田藩と仙台藩の境界として重要な街道となったが、大正時代に岩手と秋田を結ぶ現在の国道107号が開通すると廃道化し、いつしか地図上からも人々の記憶からも消えて去ってしまう。

古道は「奥羽山脈緑の回廊」や栗駒山・栃ヶ森森林生態系保護地域のコア部分を横断する高低差5000m以上の急峻なルートで、大部分がブナの原生林に覆われていることから、「古のブナ街道」

として親しまれている。

第7回「とうほく街道会議」を開催

80年の時を経た平成2年。旧岩手県胆沢町愛宕公民館が、ジャングル化した山脈越えの仙北道を踏査し、これがきっかけで県際連携による失われた古道の調査活動が始まった。

平成8年には「仙北道を考える会」（東成瀬村）。平成10年には「仙北街道を考える会」（旧岩手県胆沢町）が発足し、以降毎年8月下旬、隔年で相互を起点とする仙北道の縦走交流が行われている。また両県関係者は、重い刈払機を背負って古道に入り、貴重な文化遺産を後世に伝えるため、地道な保全活動を継続している。

東北地方の歴史や文化、風土や自然豊かな景観など、多くの魅力を掘り起こし、次代に引き継ぐ活動を展開している「とうほく街道会議」（仙台市）は昨年10月、仙北道の存在と文化的な価値に注目し、当村を会場に東北管内から200人の参加者を得て、第7回とうほく街道会議を主催した。



「古ブナ街道」

これに併せて、当村では、現地画像や空撮を盛り込んだガイドブック『よみがえる仙北道』を発刊し、仙北道の魅力を内外に発信している。

自然と文化を守る「小中連携事業」

当村教育委員会では、子どもたちの知・徳・体をバランス良く育てるため、校種や年齢の枠を超えた「協働」の取り組みを進めている。

村を縦断する国道342号。毎年その沿線に、小中連携事業によりキバナコスモスを植栽するなど、景観保全の活動を推進している。この事業は、地域の人々に対する感謝の意を表すことのみならず、来村される観光客への「おもてなし」度向上にも大きく貢献している。

子どもたちが採取した種は地域の方々へプレゼントされ、そのことが自身の豊かな人間性を育むばかりか、社会性を身につけることにつながり、さらにこの連携事業は村内各集落の活動にも波及効果を及ぼしている。



「日本で最も美しい村」連合加盟ポスター

「日本で最も美しい村」連合加盟

昭和初期の政権が描いた「奥羽横断道構想」、その象徴的存在である「田子内橋」。日本海と太平洋側を結ぶ主要ルートとして、平安時代に登場し、古のブナ街道と呼ばれる「仙北道」。その歴史ストーリーの舞台となる「奥羽山脈緑の回廊」。これら特徴的な自然と文化の素材を登録資源として、東成瀬村は平成21年に「日本で最も美しい村」連合に加盟した。

自然と人間の営みが長い年月をかけて作りあげた小さな素材。東成瀬村は、この素材をしつかりと未来に残すため、連合が目指すべきコンセプトに共鳴し、今後もNature（自然）とCulture（文化）を融合した、オンラインワンの活動を展開して行く予定である。



自然と文化を守る協働の取り組み「小中連携事業」

ベジタフルーガーデン 昭和村 ―赤城山麓に広がる雄大な農村で景観づくり―



群馬県昭和村役場 企画課地域振興係 主任

梶山友則

昭和村は、群馬県の北部、新潟県と隣接する利根郡にあり、「日本百名山」に数えられる赤城山の北西麓に扇状に広がる村である。人口は7602人（平成24年1月末現在）。面積は64・17平方キロメートルで、その約40%が農地という農業が大変盛んな村だ。

標高は260メートル〜1461メートルと高低差があり、標高500メートル〜800メートルにかけて広がる赤城高原では、武尊山、谷川岳などの「日本百名山」を一望できる雄大な緑の農地が広がっている。

ここでは準高原地帯という冷涼な気候を活かし、「生産量日本一」を誇るこんにゃく芋のほか、高原野菜や果物など多様な農作物が栽培され、農村風景を保っている。その多くは首都圏に出荷されるため、「やさい王国昭和村」として、首都圏の台所を自負している。

「河岸段丘と農村風景」

村の北西に流れる利根川・片品川が悠久の時を

かけて作りだした大規模な河岸段丘が自然の美しい景観を作り出している。

また、豊富な湧水が湧き出ていて古墳時代から人々が生活を営み、江戸時代には利根川沿いの地域が沼田街道の宿場として発展してきた。

そして現在、本村の美しく豊かな自然は、住民の生活にうるおいと安らぎを与え、農業生産の基盤とかけがえのない共有財産であるとともに、観光の貴重な資源として受け継がれている。

そんな、大自然を満喫することのできる取り組みとして、次のようなものがある。

○やさい王国「歩LOOKING」（野菜畑あぜ道ハイキング）

昭和村は農業が盛んな村であり、観光面での取り組みが弱かった。そんななか、今年度より観光拠点となる道の駅「あぐりーむ昭和」がオープンするなど観光に対する村の機運の高まりを受け、今年度から昭和村の農業や農村景観を生かした観光・グリーンツーリズムに取り組みうと、「歩LOOKING」（歩くとルッキング「見る」を掛



昭和村の河岸丘を赤城高原を望む

け合わせた造語」を実施している。

これは昭和村の豊かな自然と武尊山、谷川連峰、榛名山に囲まれた大空の下、野菜たちが元気に育つ畑がどこまでも続く、雄大な景色を眺めながらのウォーキング。参加者はガイドの話に耳を傾けながら大自然を満喫している。

今後は、今年の成果と課題を踏まえ、定着に向けてさらに磨き上げを行っていききたい。

○連合に加盟し、「やさい王国昭和村」フォトコンテスト実施

昭和村のかけがえのない景観・文化を残すために、平成21年10月に「日本で最も美しい村」連合に加盟したことを記念して、本村の持つ四季折々



フォトコンテスト写真撮影会のような



「歩ルッキング」(野菜畑あぜ道ハイキング) のようす



暮らし継がれている大型養蚕古民家

内の特定非営利活動法人の専門家の先生等の意見をうかがいながら、地域住民とともに調査研究を行っている。合わせて昭和村の美しい景観を後生へ、引き継ぐために景観条例の制定を目指すべく検討を行っている。

の美しい自然や風景、農村景観、祭りや農産物を題材とした魅力ある昭和村をPRするために「やさしい王国」をコンセプトとして、フォトコンテストを実施している。

第1回開催時には、予想を大幅に上回る687点(一般473点、ジュニア214点)の応募があり、多くの方に本村の持つ魅力を写真を通じて発見していただき、さらに活力ある村づくりに貢献できた。

また、フォトコンテストの入賞作品は、手さげ袋やカレンダーとして活用し、昭和村を効果的にPRしている。

なお、フォトコンテストは今後も実施する予定であり、興味がある方は、是非、群馬県昭和村に問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください

だきたい。

「歴史を残す家並みと横井戸」

村の歴史は古く古墳時代から人々が生活を営み、村内に残る数多くの史跡から当時の生活がうかがわれる。

特に、江戸時代末期からは養蚕が盛んに行われ、利根川・片品川沿いの集落では明治から昭和にかけて造られた茅葺きの大型養蚕民家と、元は板葺きと思われる大型総2階の養蚕民家が混在し、それに付属する土蔵や、歴史を残す家並みなどが残っている。

養蚕民家は、その時代・時期に応じた住民の生活文化として生まれたものであり、その形態は一

様ではなく、地域によって様々な形態と特性を持っている。さらに、集落の信仰となった神社や祠、お堂なども大きく変わることなく残っている。また、本村生越地区では、明治19年から21年にかけて住民の力だけで大がかりな土木工事を行い、横井戸を掘り集落給水を行ってきた。

これは貴重な文化遺産であり、集落共同体のシンボルでもある。現在は簡易水道が整備されたものの、横井戸の水は、今もなお、地元の人たちに野菜洗いや泉水などに使われている。

先代より引き継がれ、美しく良く手入れされた家並みや庭、田畑などは、村の共通の誇りとなるものであり、今後これらを活かした魅力ある景観づくりを進めていくことが重要である。

このような貴重な地域資源を守ろうと現在、県

御嶽山、木曽馬などの地域資源活かす ―「木曽ブランド確立」をテーマにまちづくり―



木曽町役場企画財政課企画係長

● 木村恭一

きっかけは合併時のブランディング

平成17年11月に4町村が合併して誕生した木曽町は、人口は1万3000人ながら長野県の町村では最も広い476平方^{キロ}メートルの面積をもつ。合併した自治体の連合加盟は珍しいが、木曽町では合併時に「木曽ブランドの確立」をテーマにし、その具現化策として連合に加盟を申請、全国で9番目の加盟村となった。

当初から町全域での加盟を望んでいたものの、農村的景観を色濃く保ち、木曽馬やそばなどの地域資源を有する開田高原の地域加盟が、連合初のモデルケースとして認められた、木曽町全体では1万人以下の加入要件に抵触すること、木曽福島地域が市街地を有するため、連合が意図する「村」より「市」に近いこと、さらに合併間もないこともあって全体に統一感が乏しいなどの理由があった。

開田高原の取り組み

認定を受けた開田高原では、住民でつくる「開田高原地域協議会」が主体となり、美しい村を守り続ける取り組みを始めた。

一斉ごみ拾いは、協議会が購入した自走式草刈り機や刈り払い機を貸し出すことで作業をしやすくし、次第に学校や商工会、観光協会などの団体が参加する地域が一体となった活動になり、ひとりで広範囲を担う住民には表彰することで感謝の意を伝えるなどした。

こうした活動が、やがて散在する廃屋や廃車の撤去、壊れた水車の修復や旧飛騨街道の遊歩道整備、道路沿いの支障木の伐採などの大規模作業にもつながった。

また、地元有志が織り機の収集や復元に努め、木曽の枕詞といわれる「麻衣^{あやふね}」に代表される「麻織文化」の再生活動を行うとともに、開田高原の伝統芸能である「姫獅子舞」の復活に取り組むな

ど、美しい村に奥行きを与え、地域への愛着を育む伝統文化の継承にも力を注いだ。

開田高原の活動は、ごみ拾いや文化継承などごく地道なものである。しかし、地元住民の手でできることから始めた結果、地域を誇りに思う住民が確実に増えたと言える。行政も柳又地区の電柱の移転を進めて、伝統的建造物群保存地区への申請を模索している。

こうした中、地域の自立に向けた取り組みも始まった。平成20年、農村開発を目的に地元が出資して「おんたけ有機合同会社」を設立。連合協賛企業の協力により商品開発したゴーフレットは、地元の特産品であるトウモロコシに付加価値をつけて開発され、好評を得ている。

寒暖の差が激しい地域で栽培された野菜は素材の味そのものでも十分勝負できるが、あえて加工することが経済活動と雇用を創り出し、需要が増えて遊休地が活用され、環境保全にもつながっている。



麻織り

木曽町全域で加盟へ

平成23年、合併して約6年が経過し、木曽町も一体としてその良さを発信できるようになったところで、全町加盟を申請して認定を受けた。

美しい村連合では、未来に残したい複数の地域資源があることが認定の要件であり、全町認定にあたって木曽町が挙げた地域資源は「木曽馬」「御嶽山」「街道文化」の三つである。

「木曽馬」は、日本在来馬の一種で、一時は絶滅が危惧されたが、現在全国に150頭、町内では約40頭が飼育されている。

「御嶽山」は、3067mの独立峰で、麓から望むその雄姿は観光客を魅了し、修験山としても名高い。信者が建てた霊神碑は2万基以上にのぼり、スピリチュアルで荘厳な雰囲気を出している。一般の登山客も多く、夏山シーズンは賑わいを見せる。



御嶽山



福島宿



木曽馬

「街道文化」は、人と情報が行き交う中山道の

中間点に位置し、〃木の国〃として育まれたこの地方特有の文化を指す。歌い継がれた民謡は数多く、なかでも木曽節は全国的に知られている。宿場の復元にも取り組み、特に福島宿上の段では、古民家を店舗に改修、地元素材を提供する食事処として好評を得、約20人の雇用も生み出した。宮ノ越宿は木曽義仲所縁の宿場で、松並木の宿場は中山道で最も美しいと言われていた。

往時の面影を残す建物もあることから、今後の地域づくりは、町屋の復活など宿場の再生を軸とすることで、ひいては地元建築材の活用や木曽独自の建築技術の伝承にもつながっていく。

「ヘルシータウン構想」で自立を目指す

これらを総括する取り組みが「ヘルシータウン構想」である。ヘルシータウン構想は、温泉、森林、食材など木曽のあらゆる資源を用いて健康保

養地を創造し、交流人口の拡大を目指す構想である。総合的な自然療法を取り入れることにより、人間が持つ自然治癒力を引き出し、免疫力を高める運動拠点とすることが狙いだ。

メニューのひとつに、木曽馬を使ったホースセラピーがある。乗馬によるバランスのよい有酸素運動が、身体機能の回復効果を高めるもので、現在、地元の養護学校が取り組んでいる。いずれは身障者から健常者まで幅広い層を受け入れて、木曽馬という貴重な地域資源を活用しながら保存していきたい。

ホースセラピーの他にも、森林浴や温泉浴などさまざまな自然資源も取り入れた複合的な健康保養地化を目指しており、すでに地元の総合病院「木曽病院」では医療的見地から二カ所で森林セラピーに取り組んでいる。

また、食生活面でも塩を使わず乳酸菌で発酵させた健康的な漬物「すんき」がある。植物性乳酸菌由来の機能性を持つ独特な食品であり、これに付加価値をつけて商品化をめざす「地域資源研究所」を立ち上げた。

木曽町は、心と体のリハビリに訪れる方を、まずは美しい環境で迎ええることを最も大切にと考えている。合併の弊害はまだであり、気持ちが一つになるにはもっと長い年月が必要だが、美しい村を宣言し、みんなで美しい村づくりに協働することで、やがて気持ちのひとつになることを期待している。美しい景観を残し、自立する町につながるという「日本で最も美しい村」宣言の原点が、ここにある。

農山村の原風景が残る山里の魅力 —アンチエイジングの里めざす村づくり—



高山村役場総務課 主査 ● 島田 誠

女優・吉永小百合主演の映画「北の零年」で冒頭シーンのロケが行われた水中のしだれ桜や、樹齢600年以上と推定される坪井のしだれ桜をはじめ、高山村には樹齢百年を超えると言われた桜が村内に20本ほど点在し、春には一本桜として美しく咲き誇り、多くの訪れる人を魅了している。

そして周囲の扇状地に広がる果樹・田園地帯、先人の営みを通じて根付いた農山村集落と山並みとが調和し、そこに住む人達によって育まれた高山村固有の美しい景観や、心が癒され、懐かしさを感じる山里の原風景が広がっている。

松川溪谷と笠岳山麓の自然美

本村の85%は森林で占められ、そのうちの東部山岳地帯は上信越高原国立公園に指定されている。

この山岳地帯に源を発する「松川」の溪谷には、春、山腹に点在する山桜が咲き誇り、秋は広葉樹が一斉に色づきV字の溪谷を錦織に覆う。

笠岳（標高2076m）の山麓に広がる山田牧場では、春から秋にかけて牛馬が放牧され、牧歌的な風景がスイスのような雰囲気醸し出し、日没時には北アルプスが一望できる雄大な夕景に見える。冬には、天然パウダースノーの中でスキーやスノーボード、動物たちの雪上観察などを楽しまため、県内外から観光客が訪れている。

また、松川溪谷に沿って泉質を異にする8つの温泉は、古くから湯治の宿、癒しの温泉場として受け継がれた伝統と歴史を有している。さらに、滝の裏側から迫力ある滝を見ることが出来る「雷滝」、落差180mに8つの滝壺を持つ「八滝」、岩壁に三段の滝筋を彩る「七味大滝」等、幾つもの勇壮な滝を見ることができる。

環境保全型の農村景観

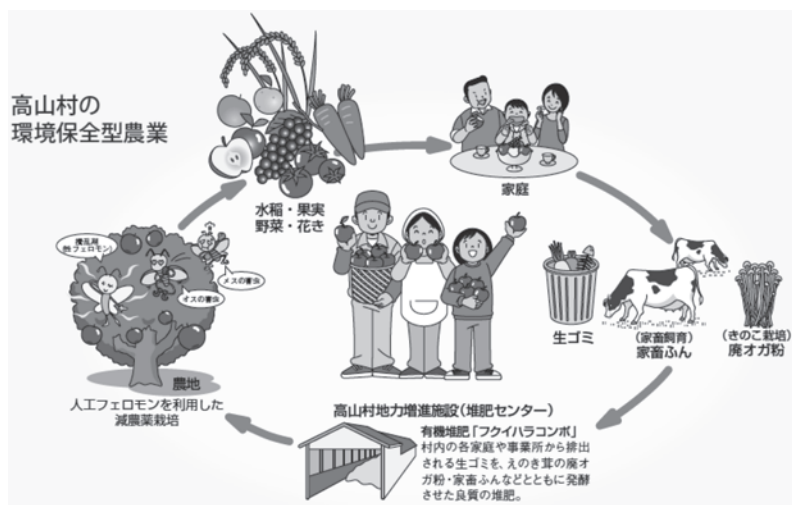
昭和57年、当時主流だった生ごみの焼却処分をせず、「地力増進施設」で生ごみを家畜ふん、えのき栽培の廃おが粉とともに堆肥にして農地に還

元する「環境に配慮した資源循環型農業」システムを、他市町村に先駆けて構築した（図参照）。その後、施設の老朽化に伴い、平成11年に微生物を活用した高処理能力の設備を設置。平成17、18年には増産のため発酵レーンを増設し、周辺住民への臭気対策のため原材料の脱臭棟を建設し、環境と住民に優しい施設とした。

この堆肥「フクイハラコンポ」の生産には、全村民の理解と協力が不可欠であり、出来あがった良質な堆肥を利用して生産された農産物は、本来持つ美味しさを醸し出し、農家のみならず村内外の消費者から注目を集めるようになっていく。

主力農産物のリンゴ栽培にもこのフクイハラコ

図 環境保全型農業





ワイン葡萄畑



山田牧場

ンボが活用され、あわせて人工性フェロモンを利用して、殺虫剤の使用を抑えた減農薬栽培に取り組み、安全安心な「信州高山さわやかリンゴ」のブランド化が図られている。

このように、農産物のブランド化は、景観の保全と新たな農業振興の双方にとって非常に有効であると考えられる。

また、本村は降水量が少なく、日照時間が長い、さらに昼夜の寒暖の差が大きく水はけのよい土壌に恵まれた自然条件を活かし、平成17年からワイン葡萄の栽培に取り組み、省力栽培や耕作放棄地の解消に成果を上げている。このワイン葡萄で醸造したワインは国際コンクールで金賞を受賞するなど、その評価は高い。

米作りにおいても農業に頼らないアイガモ農法や不耕起栽培が行われていること、全村に下水道が完備されたことにより、水路・河川の水質が大

幅に改善され、ホテルが舞う豊かな田園風景を戻そうと村内各地で保全活動が行われている。高山村は、安全で安心な環境にやさしい農作物の生産を目指した取り組みの先進地となっている。

山里の原風景を次代へ継承

他方、農業者の高齢化や有害鳥獣による被害等の理由から、農林業の担い手が減少し、手入れがなされない遊休荒廃農地・森林が増えている。

また、住宅団地の増加で、周囲の自然景観と調和しない色や形の建築物も見受けられるようになり、かつての美しく生き生きとした農村景観は、徐々に変わり始めていた。

こうした状況から景観保全への機運が高まり、平成20年に県内の村で初の景観行政団体として、景観条例を制定し、景観計画を策定した。

「四季折々の雄大な眺望やホタルなどの生物が存在しうる豊かな自然、扇状地に広がる果樹・田園地帯や先人の営みを通じて根付いた農山村集落の風景、寺院や史跡などに長い年月を刻んできた歴史、周囲の山並

みと調和したまちなみなどによって育まれた高山村固有の美しい景観を守り育てるとともに、自然と人が共生し、高山村の風土として今も残る山里の原風景を次代へ継承する。」（高山村景観条例第2条 基本理念）

高山村にとっては、のどかな農山村の景観を守っていくことが第一の命題であり、大自然と一体となった田園風景をいかに守っていくかを景観計画の大きな柱とした。

「高山村の風土として今も残る山里の原風景を次代へ継承する」ことを基本理念とする高山村景観計画では、高山村の美しい景観をかたちづくる要素を、「自然」「歴史」「くらし」「風土」の4つに分類し、要素ごとに景観形成基本方針を定め、また、村内を地形や人々の暮らしの営みなどにより5つのゾーンに分類し、ゾーニングによる景観特性に基づく景観形成方針も定めている。

これら方針に沿った景観保全策として、建築物等の届出基準や景観形成基準など、行為の規制についても定めているが、総じて農山村全体の景観保全策を主な内容としているという点で、都市部のものとは趣の異なる景観計画となっている。

訪問者の元気を回復する里

高山村は、豊かな自然の中を歩くトレッキングや安全安心な食材、心身などを癒す温泉などアンチエイジングのキーワードである運動・栄養・休養・生きがいの要素を有し、訪れる皆さんの元気を回復するアンチエイジングの里を、これからめざして村づくりに取り組んでいきたい。

東白川を後世に残すために

―住民に根付く互助精神でつくる美しい村―



岐阜県東白川村役場総務課 企画財政係

● 河田 孝

東白川村は、岐阜県的美濃地方、加茂郡の最東端に位置し、標高1000^ト級の山々に囲まれ、総面積8711^ヘ、人口は2600人余りの典型的な中山間地域である。高齢化率は37・8%（2011年12月末）、小学校、中学校（各1校）の児童・生徒数は212人と、少子高齢化の課題は、全国の中山間地域と同様である。

県内に2つしかない村のひとつ

岐阜県には、平成の大合併以降、「村」はわずかに2つしか残っていない。一つは全国的に、というより、世界的に有名な世界文化遺産・白川郷を持つ白川村であり、もう1つがわが東白川村である。

白川村より幾分？知名度が低いわが村は、その村名からか、この白川村の東に位置する村かと思われることが多い。以前は、よく役場へ「今年の合掌村の雪はどうですか？」とか「道路は何センチくらい雪が積もっていますか？」といった問い

合わせが多くあった。余談だが、岐阜県の地図を思い浮かべていただきたい。

岐阜県は飛騨地方と美濃地方に分かれており、おおざっぱに言えば地図の真ん中あたりに線を入れ、上が飛騨地方、下が美濃地方となる。

白川郷の白川村は飛騨地方で富山県寄り、美濃地方のわが村はどちらかと言えば愛知県寄りである。積雪も東白川村では、1シーズンに1回か2回降る程度で、30^{センチ}も雪が積もれば、それこそ「大雪！」といった感じのところである。

こうした白川村の隣……と勘違いされるような問い合わせが減ったと感じるようになったのは、いわゆる幻の珍獣「つちのこ」に懸賞を懸けた捕獲イベントを始め、それが定着してきたこ



雪化粧



つちのこフェスタ

とによると考えられる。

平成元年にスタートしたこのイベントは、スタート時に生け捕り賞金100万円でスタートし、見つからなければ毎年1万円ずつアップする、というもので、幸か不幸か？まだ、見つからず今年のイベントの賞金は123万円となった。

投げた小石の波紋は幾重にも広がり、今や「東白川」という村名は覚えていただけてなくても「つちのこ村」として名前を売ることとなった。

引き継がれている互助慣行

東白川村は、その村名の由来ともなった清流白川が村の東西を貫流している。この白川とその本流及び支流に沿って20の集落が点在している。

現代ではほとんど死語となったが、かつて村には互助慣行として、モアイ（共同労働）、テマガイ（交換労働）、テツダイ（労力提供）といった



鮎の友釣り



環境整備作業

慣習があった。

いわゆる共同作業は、春の田植えの時期、秋の収穫の時期にはどこでも見られた風景であった。村では昭和60年代から土地改良事業に着手、全村的に圃場整備事業を行ったことにより、水田面積も大型化し、水田作業は一変した。機械化営農組合の発足により、大型機械が導入され、いわゆる共同作業の必要がなくなった。

このため、モアイと呼ばれた共同労働は姿を消した。今では、葬式モアイ（お葬式の場合に集落内の班単位で助け合う）がその名残りだ。これも、セレモニーホール等の進出で姿を消しつつある。こうした言葉は、使われなくなったが、その活動は、ある意味、現在でも引き継がれている。

それが、集落ごとの環境整備活動や、花かざり活動である。舗装道路が整備された現代とは違い、かつては「道づくり」と称して、年に何度かは手弁当で道路の修繕活動などの共同作業を行っていた。

た。それが引き継がれて現代では、集落ごとに道路沿いの草刈り作業であったり、花植え活動であったり、川掃除であったり、さまざまな活動を展開している。ほとんどの集落では、一戸一名が出席して行われている。こうした活動は、行政がお願いして行われているものばかりではない。

村全体で年2回の河川清掃も

同様に村全体として、年2回春と秋に村民に呼びかけて白川の河川清掃を行っている。村民の自慢でもある清流・白川は、鮎の友釣りが有名であり、この友釣りの時期は、村外からのたくさんの釣り客でにぎわう。

春と秋、白川の河川清掃を行うのは、この鮎の友釣りの解禁（毎年6月初旬）前と、シーズンオフになる10月頃に実施している。春の河川清掃は行政が主導して行っているが、秋の清掃は、村の観光協会と商工会が主催して実施している。毎回全体で500人程度は参加している。

これも、前述の集落における環境整備同様、住民の意識の中にかつての互助慣行があり、地域をよくしたい、美しくしたいといった気持があるからではないか、と考えている。

そんな東白川村は平成23年、「日本で最も美しい村」連合の仲間入りをすることと

なった。加盟理由は至ってシンプルで、まず村には、観光資源と呼べるものは皆無であり、観光資源どころか、一時は「ナイナイ村」と呼ばれるほど何もない村で、「むしろそれを売りにしてはどうか」といった意見もあるほどであった。

「ナイナイ村」が唯一誇れるのは美しい自然風景

例えば、信号がない（現在は点滅信号がある）、国道（現在1路線）がない、もちろん鉄道はない、岐阜県には海はない、さらには、詳細は省くが、村は明治初期新政府の行った神仏分離政策からなる廃仏毀釈によって、お寺が壊され、今なお、お寺はない。冠婚葬祭全てを神道で行うという全国でも珍しい「お寺のない村」である。

あるのはただ山と川のみである。そんなナイナイ村が村外に向け唯一誇れるものは、美しい自然風景である。この美しい自然を観光、誘客の目玉にするための手段の一つとして連合への仲間入りを目指したものである。

イベント等で、村を訪れる村外からのお客さんは、村の自然景観を高く評価されますが、実際、村に住んでいる人間は、自分たちの村が美しいという意識はあまりないのが現実で、過疎化・高齢化という課題の中、何もしなければ、この美しい風景も荒廃してしまう。

村民性ともいべき連帯感に加え、自分たちの村は「日本で最も美しい村」に選ばれたという誇りと自覚をもって、この美しい自然を守っていくこと、また、後世に残し伝えることが私たちの責務であると考えている。

豊富な自然資源活かし観光に注力

—日本で「最も美しい高原」を目指して—



奈良県曽爾村 総務課

● 森澤英之

曽爾村は、奈良県の東北端に位置し、三重県名張市、津市、奈良県御杖村、宇陀市及び東吉野村に隣接している谷間盆地である。

約1300万年前活発であった室生火山群によって、西側の岩肌もあらわな鎧岳、兜岳、屏風岩などの珍しい柱状節理の美形は国の天然記念物に指定されている。また、東側に位置する俱利伽山、亀山、古光山などのなだらかな山々とその山麓に開ける雄大な曽爾高原一帯は室生赤目青山国定公園に指定されている。

村の総面積は47・84平方キロメートル、人口わずか18



曽爾村地図

13人（平成24年2月1日現在）の過疎地域である。産業は農林業を基幹としているが、農業は経営規模も小さく、林業に至っては近年の木材価格の低迷等により山林を良好に維持することが困難になるなど、その経営基盤は揺らいできていることから、第2次・第3次産業を組み入れた複合経営を行っている。

観光促進のために取り組む諸事業

そのため、村では豊富な自然資源を活かした観光産業に焦点を当て、事業に取り組んできた。

その一例として、▽本場ドイツ仕込みの地ビール▽地域の新鮮な野菜を食材にしたレストラン▽直売所などを兼ね備えた曽爾高原ファームガーデン▽曽爾の大自然で育まれたお米を使った米パン製造販売「お米の館」▽美人の湯と名高い曽爾高原温泉「お亀の湯」——などを整備した結果、平成10年度に比べ約1・5倍の約46万4000人近い観光客が訪れるようになった。

しかし、来訪者が増える一方で少子高齢化により、先人たちが築き上げてきた景観を保全していくことに課題・問題も生まれてきた。

そのため、村は新たな取り組みとして平成21年10月、「日本で最も美しい村」連合に加盟し、豊かな農山村の景観や環境・文化を守る活動、自らの村に誇りを持つて自立し、将来にわたって美しい村であり続けるための活動を展開し、後世に引き継いでいく活動を行っていくことを宣言した。

ススキの草原や「名水」の湧き水も

その連合に評価された「曽爾高原」はススキで一面に覆われた草原で、3月中頃に毎年山焼きが行われ、春から夏にかけては一面に青い絨毯が敷



ススキで覆われた草原を山焼き



「名水百選」に選定されている曾爾高原の湧き水

かれたような爽快な姿を見せる。

秋にはススキの穂が陽射しを浴びて銀色・金色に輝き、毎年多くの観光客が訪れ、また、曾爾高原の中腹には「お亀伝説」が残るお亀池があり、湿原特有の希少な植物を見ることができるとのこと。

曾爾高原のススキは、昔、在所地区の屋根の材料として使われていた。現在、ススキ以外の植物の生育を抑え、山焼きで発生した灰は肥料とする目的で毎年3月に地元の人々の努力によって山焼きが行われ守られている。

この曾爾高原からの湧き水が「平成の名水百選」に選定されている。お亀池を中心とした点在する「曾爾高原湧水群」は、地域の豊かな生物を育む

源となっている。周辺にはササユリやサギスゲの群生等が確認されており、これらの自然を保全するため「曾爾村環境保全条例」が制定されている。また、曾爾高原の隣接には、国立曾爾青少年自然の家があり、近畿・中部圏より青少年が施設を利用している。これらの利用者は曾爾高原の自然に触れ、また専門の指導員等による自然環境に関する体感学習を行っている。

過渡期を迎えた自然の産物

しかしながら、その曾爾高原は今、過渡期を迎えている。地球温暖化の影響か、あるいは人間が自然の摂理を壊しているのか、ススキの生育が芳しくない状況が続いている。その答えを知るにはススキの生育状況を見守るより他はないが、自然景観を観光客誘致の資源としてPRしている自治体にとって保全は重要な課題である。

従来、曾爾高原を管理・保全するために、青年団が定期的なゴミ拾い、高原の在所自治会が肥料やり、そして新しい息吹を芽生えさせるため山焼きを行ってきた。しかし、少子高齢化による人口の減少はその活動を困難なものとし、それぞれの会は辞退を申し出た。

そんな中、有志による会を結成し、曾爾高原を守っていこうという会が発足した。それが「曾爾高原守る会」である。

十数名の会ではあるが、行政からの働きかけによるものではなく、「曾爾高原」を守り続けようと思う人々の集まりであることに意義がある。

景観を守るためにはこうした団体が必要であ

り、この活動を続けていただくために村はこれからもバックアップし続けたい。

皆さんにお願いしたいこと

曾爾村は観光振興の拠点として、今後も「曾爾高原」をPRしていきたいと考えている。PRしていく限りは、自然を損なうことなく、かつ観光に訪れていただいた方に「安らぎを与える場所」でなければならぬ。その裏側で地域の人々がこの高原の存続に大変な労力を使っていることも知っていただきたい。

現在、村では昔のように背丈のあるススキを復活させるために調査・研究を行っている。観賞される方は「一度失った自然は取り戻すのに長い年月を要する」ということを踏まえて、大自然の中のススキを楽しんで下さい。

最後に、曾爾村の美しい景観づくりを推進していくには、地方自治体のみならず住民・民間企業そして、曾爾村を訪れる来訪者がそれぞれの立場で協力してもらうことが重要である。

そのためには景観づくりに対する共通の認識を持つことがまず第一歩であり、何をすれば美しい村づくりができるのか、今後村民が一致協力して、美しいふるさと「曾爾村」の景観をつくっていく必要がある。

まだまだ景観・環境保全に対する知識など欠如している部分が多いが、曾爾村の自然を守っていく、日本で最も美しい高原を目指してという志を高くもってこれからも邁進していきたい。

米のブランド化で棚田を守る

―日本一おいしいコメの産地に観光客が―



本山町まちづくり推進課参事

大西千之

本山町は、四国の中央に位置し、四方を標高1000m級の山々に囲まれている。北側には標高1500m級の工石山や白髪山の石鎚山系が連なる風光明媚な町である。高知市から北に向かつて車で約1時間の距離で、町面積は134・21平方キロ、そのうち91%を山林が占める。

産業は第一次産業が主力であり、林業、米、園芸、特用林産物などを組み合わせた複合経営が行われている。また「花の町」として、シヤクナゲや桜などの見所も多く、春には町のいたる所が美しいピンク色に染まる。

町の中央には、日本三大暴川の一つ四国三郎「吉野川」が流れ、上流部には、「四国の水瓶」と言われる早明浦ダム（左岸側が本山町）が存在する。人口は平成24年2月1日現在で3911人、高齢化率は40・9%の中山間地域である。

経営厳しく後継者不足に悩む農家

町には約180軒の水田が存在する。これらの

水田は、吉野川兩岸にある幾多もの支流を水源として、急峻な土地を切り開き、等高線に沿った湾曲した棚田として形成されている。また、急峻である地理的条件から、水利整備やほ場整備がされていない状態だ。

この地域の農家は、水田へ水を引き入れるため、谷川から何キロもパイプを張り巡らせる工夫や機械の乗り入れが困難な水田は手作業で管理するなど、大昔からの棚田を守ってきた。

しかし、これらの水田を維持するには、広い畦畔の草刈りや畔塗り、水管理など、平坦な水田に比べ耕作条件が大変厳しい。この状況下で、さらに米価の低迷、肥料の高騰などが加わり、水稲経営が困難な状況にある。

このようなことから、稲作農業への後継者が育たず、農家の高齢化が進行している。このままでは、棚田の耕作放棄地を増加させることとなり、水田と共に築かれてきた農山村の暮らしや環境も崩壊しかねない状況にある。

コメのブランド化へ協議会設立

この状況に不安を抱いた農家たちは平成20年2月、生活の基盤である水田を守り、魅力ある稲作農業を創造するため、本山町特産品ブランド化推進協議会（以後協議会）を設立した。

しかし、ブランド化と言っても、全国的にはコメ過剰の状態。また高知のコメと言えば、早場米などのイメージが強く、消費者に根付くブランドとなるには、どのようにすればよいのか。大きな問題に突き当たることとなった。

そこで協議会は、この地域にある付加価値を模索するため、試食アンケート実施や地域の歴史掘り起こし、地域に残る環境、良食味の品種や生産方法の追究など、1年間の調査を重ね、ブランド化戦略を策定した。こうして生み出されたのがブランド米「土佐天空の郷」である。

21年産米から販売を開始した「土佐天空の郷」は、取り組みなどが評価された。全国各地で開催される品評会にも出品し、米・食味分析鑑定コンクールでは、21年産、22年産と特別優秀賞、23年



土佐天空の郷



棚田

産には金賞を受賞している。

また、22年11月に開催された「お米日本一コンテスト」で「お米」では、西日本で初めて、コシヒカリの品種以外でも、最高峰の最優秀賞に選ばれた。これも大きく報道され、日本一おいしいコメ」として知名度を高めることになった。

また、全生産農家は、先人が残した環境をより良い形で後継者につなぎたい、と県が認定するエコファーマー（土づくりや減化学肥料、減農薬など環境に配慮した農業者）を取得し、環境に配慮した農業を推進している。

棚田が観光の素材に変貌

知名度が高まり始めたコメの影響もあり、生産地である棚田には、写真家や観光、視察の方などが訪れるようになっていく。

本山町の棚田のほとんどは山林に覆われ一望できる場所は少ないが、吉延地区、大石地区の棚田は、吉野川の支流、檜ノ川の両岸に広がる棚田がその河川沿いに奥深く、一望できる場所である。

ここを訪れる方々は「この風景は、まさに日本の原風景、人々の心を和ませ魅了させる」と語る。

これまで、耕作悪条件の中で経営の一部としての維持されてきた棚田が今、町の代表的な観光の拠点として変貌を遂げようとしている。

協議会は、コメの品質や食味を高めるだけでなく様々なイベントを開催。各地のコメ販売店を招いた産地見学ツアーや県内の親子を招いた「田んぼの生き物調査隊」、水田の果たす役割やその大切さなどを伝える勉強会なども開催している。

さらに「天空の郷芸術祭」と題し、古代米を使った田んぼアートや製作や収穫祭、棚田の一面を会場にしたコンサートなど、農家と消費者とのふれあいや心に残る棚田「土佐天空の郷」の創造を目指し取り組みを続けている。

「土佐天空の郷」の取り組みは、始まったばかりである。コメのブランド化の取り組みにより、棚田の保全や地域活性化につなげ、様々な分野への波及効果を期待して取り組んでいる。

汗見川の清流保全と交流体験事業も

本山町の北部に位置する汗見川は、吉野川に合流する川である。汗見川流域には「土佐の名水40選」が2カ所あり、ます淵、お釜、おつけ淵などの景勝地や川にちなんだ伝説・昔話も残っている。

流域は三波川帯の地層で、中でも高知県の天然記念物に指定された藍閃石に包まれた枕状溶岩や、県立自然公園「白髪山」にある松の白骨林などは見所の1つだ。秋の紅葉、春の川岸にはキシツツジ、夏は流域全体でキャンプ、川遊びなどで、

県内外から多くの交流人口が訪れる。

流域に

ある6地

域では、

この清流

を保全し

ていこう

と、昭和

47年に

「汗見川を美しくする会」を設立。毎年4月に流域住民全員が参加して、清掃や桜の植樹、道路沿いの支障木の伐採、年に2回の県道沿いの草刈作業も実施するなど、流域住民全体で環境保全や景観保全活動を進めている。

また地域では、交流体験事業にも取り組み、汗見川の清流を活かして「キシツツジ体験ツアー」や夏場には多くのランナーが参加する「高知・本山汗見川清流マラソン大会」を開催している。

平成20年からは、廃校となった学校施設を宿泊施設として、地域で組織された活性化団体が主体となり運営を始め、農林業体験や地域食材の提供、交流事業の受け入れなども進めている。

流域では清流の保全活動や活力ある地域づくりなど、次代につながる「住みたくなる元気ある地域」を目指し、活動を通じて人づくりも進めながら、魅力ある地域づくりを進めている。



汗見川

歴史とロマン溢れる景観と環境保全 —新旧住民が協力して美しい農村を守る—



塚原財産管理組合 組合長
美しい村塚原協議会 副会長

● 伊東靖彦

大分県のほぼ中央部にある由布市の塚原地区は、中心街から由布岳の側面を登った標高600mの高原地帯に位置している。

西に由布盆地、東に別府温泉、南に由布岳、鶴見岳を望む自然豊かな場所である。日出生台、十文字台の高原地帯にも隣接し、古くから人の営みがあり田畑や牧場が開かれていた。

この地区は、かつて塚原村であったが、合併により昭和30年に大分郡湯布院町塚原、平成17年には庄内町・狭間町・湯布院町の合併によって、由布市湯布院町塚原となった。

雄大な農村景観に多くの観光客

塚原は、四季折々の美しい風景を奏でることができ、名峰・由布岳を背景に、稲作風景が広がり、雑木林はいたるところに覆われている。

春は由布岳、鶴見岳の山桜や原野の野焼き、夏は涼しさと鮮やかな緑の山々に野鳥の囀り、秋は紅葉と美味しい高原野菜、冬は南国九州のイメージ

ジとはほど遠く、極寒の地となり、北西の強風、一面雪景色となり、下界では味わえない厳しさがありこれも魅力の1つである。

塚原は、全国的に有名な湯布院温泉郷（塚原、湯布院、湯平）の一角にあり、その湧出量も全国でトップクラスである。遊園地や名所旧跡、城下町もなく、歓楽街があるにぎやかな温泉地ではないが、緑に囲まれた四季それぞれの美しさと安らぎを求めて、多くの観光客が訪れる。

また、山懷に抱かれた牧場で育てられた乳牛から搾乳される牛乳も、1年を通じて生産され、滋味豊かな味わいを景観とともに楽しめる。まさに、自然との共生の中での生活が営まれている。

自然共生と伝統

塚原には昔から延々と続く、伝統行事など自然の中での古くからの営みが数多く残る地区である。一夜にして99の塚を作った鬼たちの昔話もそのひとつである。



山々を望む稲作風景

「鬼たちが里人たちを苦しめているのを神々が見てこれでは里人があまりにも可哀想だと思い、この土地から鬼を追い払ってくれ、豊かで住み良い村をつくってくれた」という話にちなんで、神々に感謝するため1年を通じて祭りがある。塚原の塚にはそれぞれ神様が祭られ、山の神、水の神、火の神、土の神などが祭られており、地名の由来にもなっている。

また、毎年開催される「甘酒祭り」は、その年に収穫された新米を使い、霧嶋神社の水で甘酒を造り、神様に奉納して感謝する習わしである。江戸期・天明（1781年）にすでに開催されたと記録に残っている伝統行事である。

このように、自然、文化、歴史、伝統が受け継がれて来たのは、「住みよい里づくり」という志



大分県の畜産発祥地 塚原

保全活動と地域の活性化

塚原では、昭和40年代まで、すず竹（高野竹）があり、ノリミスを編んで収入を得ていたが、突然、竹が枯れてしまい、生計のための仕事を失った人々は村外に働きに行くようになった。

その時、塚原財産管理組合が中心となって、雄大な土地を利用して畜産を計画し、野草の地を立派な飼料畑に造りかえ、「塚原牧場」を開くことになった。

その後のバブル期の開発の波は、塚原にも押し寄せ、ゴルフ場開発などの大型開発の計画が持ち上がったが、住民たちで、この土地の美しい農村

景観を守り続けた。

平成3年には、全国の優秀な和牛を一堂に集めて優劣を競う大会「第6回 全国和牛能力共進会」が鶴見岳山麓で開催され、皇族の方々の出席の榮譽に浴した。

塚原は大分県における畜産発祥の地であり、山々をバックに、丘陵の牧草地は優雅な曲線を描き、たいへん牧歌的な風景を生み出している。

また、3年前から鶴見岳の利用されていない土地を大手企業の力を借りて植林を行っている。数年後には、秋には紅葉を観ることができるようになり、楽しみである。今後も植林を続けていく予定である。

一方、塚原地区には時代の流れから東西に高速道路が通っている。また、近々ミニインターもできる予定である。この風景には似合わないと思うが、利便さなどを考えるとやむを得ないことと思



冬は一面雪景色



緑に包まれた集落

う。

皆で協力し美しい村を守る

塚原は、過去に3度の大きな台風に襲われた。中でも昭和57年には霧嶋神社が由布岳からの土砂に埋まり、参道の千年杉と千年イチヨウの木が枯れてしまった。氏子たちは、これにも負けずに再建に取り組み、今では元の姿を取り戻している。

ただ、「雛戸川」の水量が10年前に比べて半分の量になっている。野生の猪、鹿が増えて農家や林業家が困っている。農家の人たちの意欲が半減するのではないかと心配し、住民十数名が猟師の免許を取り、猪や鹿など害獣の捕獲に当たるなどの対策を講じている。

また、近年では、さまざまな考え方を持った人が移り住むようになり、過疎高齢化が問題になっている。自治活動において何かと問題も増えてきている。

今後は、新旧住民同士がお互い理解して、活動をしなければ「美しい村 塚原」は守れないと思う。そうして、住民の誰もが地域に誇りを持ち、協力し、豊かで住み良い里をつくっていききたいと思う。

景観や環境・文化を守る活動

―霧島山麓の小さなまちが輝き続けるために―



高原町まちづくり推進課商工観光係 主査

● 岸元誠樹

豊かな自然と人と歴史が出会うまち

高原町は、宮崎県の西南部、国立公園霧島山に境に、鹿児島県と接する静かな山あいに位置している。人口は約9千800人。面積は38km²で、その約50%を山林原野が占めている。

また、霧島山系から豊富な湧水が大小河川となり町内を流れていることから、水と緑に富んだ自然豊かな町として知られている。

町の基幹

産業は農業で、中でも畜産業の割合が高く、農業粗生産額の7割超は畜産で占められている。とりわ



高原町地図

け、肉用牛の生産が盛んで、その肉質の良さは県内外でも高く評価されているところである。

連合登録地域資源でもある霧島山の秀峰「高千穂峰」は、昭和9年に日本で最初に指定された国立公園「霧島錦江湾国立公園」内にそびえている。「高千穂峰」は天孫降臨の地（神々の舞い降りた地）としても名高く、神話伝説も数多く言い伝えられており、峰の頂には、天孫降臨の際にニニギノミコトが突き立てたといわれている「天逆鉾」がある。かの坂本龍馬は新婚旅行で訪れ、この逆鉾を抜こうとし



霧島山の秀峰「高千穂峰」の頂にある天逆鉾



国指定重要無形民俗文化財「高原の神舞」（祓川神楽の十二人剣）

た、とも伝えられている。

高千穂峰の麓には、噴火活動によってできた周囲4km²、最大水深103mの火口湖「御池（みいけ）」があり、緑豊かな森が訪れる方々の心と体を癒してくれる。この「御池」は、全国でも4カ所しかない国設の「野鳥の森」の指定も受けており、樹齢100年を超える広葉樹の森に、ヤイロチヨウ、アカシヨウビン等の多く野鳥が飛来する。

また、御池野鳥の森公園には、4タイプのコテージがあり、キッチンや冷暖房も完備し、年間を通じて居住性は快適な霧島観光の基地としても利用できる。

高千穂峰の周囲には、平安時代に整備された「霧島六社権現」という6つの社寺があり、その中の狭野神社、霧島東神社が高原町にある。

この2つの神社および氏子の家には「狭野神楽」

「祓川神楽」が伝承されており、その2つの神楽を総称して「高原の神舞」と呼んでいるが、この神舞とは、江戸時代、民家の庭先に大規模な舞庭を作り、夜を徹して舞われる旧薩摩藩内の神楽を指し、この大規模な屋外の舞庭の他、真剣や長刀など武器を使用した舞が多いことや、舞いながら神歌を歌わないこと、岩戸神話を積極的に取り入れていること、などが特徴とされている。

今日、旧薩摩藩の神舞の多くが衰退あるいは消滅してしまったが、そのような中、高原町の狭野神楽、祓川神楽は古来の神楽を絶やすことなく、現在も夜を徹して様々な舞が奉納され、訪れた人々を魅了している。

こうした価値が認められ、「高原の神舞」は平成22年3月11日に国重要無形民俗文化財に指定された。

「日本で最も美しい村」づくりを 目指して

平成18年10月に「日本で最も美しい村」連合に加盟した高原町は、失ったら二度と取り戻せない町の景観・文化を守りながら、小さくても輝くオンリーワンの地域づくりを知恵を出し合い、進めているところである。

そのような中、町では今後も地域住民が自らの地域に誇りを持ち、高原町が将来にわたって美しい地域であり、住民自らの積極的な活動を推進するために、「高原町美しい村づくり推進事業支援補助金」を制定。美しい村づくりの取り組みを行う地域の団体等に対し支援を行っている。

この「高原町美しい村づくり推進事業支援補助



地域住民による道路残地を活用した花壇づくり

金」については、1団体10万円を限度に補助しているものであるが、平成22年度には8団体、平成23年度には13の団体が取り組んできた。

それぞれの団体が、地域の道路、水路等の環境美化活動や道路残地等への花の植栽整備のほか、「おふくろの味」の伝承や「おねっこたっこ」「六月灯」といった地域に残る伝統行事の継承に取り組んでいる。

また、毎年12月に行われる狭野神楽、祓川神楽では、灯籠の設置を行うなど、夜を徹して様々な舞が奉納される神楽の神秘的な演出に寄与する活動や、「日本で最も美しい村」連合の準会員の50名で構成する「日本で最も美しい村連合高原推進協議会」では、美しい村づくりへの機運を盛り上げようと、啓発看板の作成や植栽活動等とともに、景観・文化を守る積極的な活動が行われている。

古事記編纂1300年、天孫降臨を 伝える霧島山と共に生きる

今年は、日本最古の書物「古事記」が編纂され1300年の節目の年でもある。高原という地名の由来は、天孫降臨伝説の中にもでてくる、かつて神々が暮らした「高天原」が転化したものだと言いつたといわれている。

また、古くから高原町は、第一代天皇神武天皇の地として語り継がれている。神武天皇の御生誕の地と伝えられている皇子原。御誕生されたとき諸物を洗い清められたと伝えられる血捨之木。ニギノミコトがその地を大変気に入れられ宮居を建てて高千穂の宮として滞在し、その後、子孫である神武天皇が幼少の頃御両親としばらくの間お住まいになったと伝えられている宮ノ宇都。御幼少の時、水遊びをしたと伝えられている皇子港、皇子滝などこの他にも神武天皇のゆかりのある地や史跡——など、伝えられているものが数多くある。

昨年1月26日に起きた霧島山新燃岳の大噴火は、町民生活、そして町内の全産業に大変な打撃を与えた。いまだに新燃岳の噴火は終息しておらず、今なお活動を続けている。

今回改めて、自然の脅威を痛感することとなったが、霧島山は町民にとって、ふるさとの山として、慣れ親しんだ山であり、高原町は霧島山からの大きな恩恵を受けながら発展してきた町である。これからもこの自然と共存共栄していき、霧島山の麓に広がる美しい景観、そして数多く残る歴史・文化のもと、町民一体となった地域づくりを進めていければ……と考えている。

古琉球王朝時代の面影を追って

—景観保全と生物多様性めざすのどかな農村—

多良間村観光協会 事務局長

● 垣花 剛

琉球風水村落：

沖縄県宮古郡多良間村は、沖縄本島の南西約300^{キロメートル}に位置し、多良間島と水納島^{みなな}からなる2島1村の村である。

面積は多良間島が約20平方^{キロ}、水納島が約2平方^{キロ}で、両島とも沖縄県立自然公園に指定されている。人口は平成23年9月現在で1282人。産業は黒糖の原料となるサトウキビ作と肉用牛の子牛生産を主とするのどかな農村である。

今から500年ほど前の琉球王朝時代に、時の

権力者に

より、点

在する集

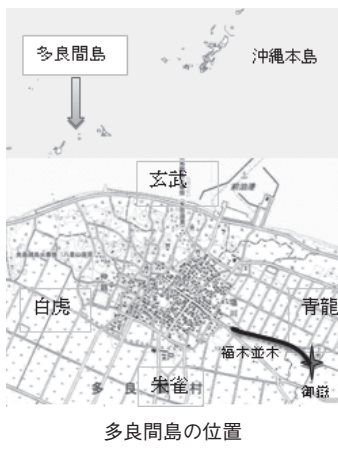
落は一カ

所にまと

められ

た。また、

1730



多良間島の位置

年代に王朝の政策と風水景観の形成が行われた。

本稿で紹介する福木並木は、地図で示すように風水という青龍の方角にある「塩川御嶽^{うたき}」への参道で、王府の林政により植栽されたものといわれる。推定樹齢200〜300年の福木の古木・大木が約650^本に続いており、沖縄県指定の天然記念物である。

「塩川御嶽」は、県指定の植物群落内にあり、脇には多良間島で最大の威容を誇る樹齢400年の福木の古木が凍とたたずんでいる。

景観保全と文化財保護施策

この「塩川御嶽」への参道は、農道としても利用されてきたが幅員が狭く、車両の往来にとって不便とのことで拡幅が望まれていた。

本村は、文化財保護の観点と、農業生産活動の利便性を考慮し、土地改良事業導入時に、参道北側に、副道的に農道を整備することで福木並木の保全と農業の利便を図った。



多良間で最大の福木

さらに、農耕による掘削で福木の樹根が影響を受けないようにとの配慮から、参道福木の南側に鉄止め擁壁の設置工事が進められ平成24年に竣工した。

本村は最も高い所で34^{メートル}という平坦な地形であるため、村民の暴風・防潮に対する意識が高く、海岸から50^{メートル}余りの林帯で琉球風水という浜抱護を形成し、集落や農作物を護る対策を行ってきた。現在、防災林植栽工事等、浜抱護の造林が継続的に行われている。

浜抱護には、国の天然記念物であるリュウキュウキンバト、カラスバト、キシノウエトカゲ、オカヤドカリなどが生息し、絶滅危惧種のヤシガニの生息域でもある。他の小動物も多数生息域しており、重要なビオトープとして生物多様性の一翼を担っている。



参道の南側に設置された鍬止め擁壁 平成22年度事業で進められた



塩川御嶽への参道 推定樹齢200～300年の福木の古木が並ぶ



土地改良時に参道北側に農道を整備することで、参道の保護・農業の利便が図られた

「塩川御嶽」の参道



一周道路に栗石のスロープをつける



側溝の栗石

動物保護の側溝改良

国の天然記念物であるオカヤドカリは、幼生を海に放幼（産卵）するため陸と海とを行き来する。そのため、海に近接している道路を横断することが多い。ヤシガニも同様で産卵期には放幼のために海に向かう。生息域である浜抱護から海に向かう途中、あるいはその帰りに一周道路の側溝の深みにはまって死んでしまうことがよくある。そうした事故を防ぐために側溝に救助スロープ

また、多良間島は隆起珊瑚礁の島であるため、遠浅の珊瑚礁が島を取り巻き、熱帯魚や海生生物のゆりかごとなっている。稚魚の餌となる植物プランクトンの供給源である浜抱護と珊瑚礁は、一体的に多様な生態系を育んでいる。島を取り巻く砂浜には、多くのウミガメが産卵のため上陸している。港湾施設の整備等で海流が変化して、産卵場である砂浜から流出した砂を補うための養浜事業も行われた。

ヤシガニ（マクガン）保護条例

世界最大級の陸生甲殻類といわれるヤシガニは乱獲により絶滅した島もある。珍味食材として珍重され高価で取引されているため捕獲者が多いという。

本村においても、ヤシガニ（島の言葉でマクガン）は、夏の風物として、また珍味食材としての地位を占めている。ヤシガニの乱獲による絶滅を防ぎ、持続的に活用し続けるために制定されたのが「ヤシガニ（マクガン）保護条例」である。

研究者によれば、本村のヤシガニの個体数はほぼ良好な状態にあるとのことである。保護することは個体数の現状維持と、ヤシガニエコツアーなど、観光資源としての活用に繋げる。



ウミガメの上陸痕

美しい日本の風景や文化を守り、後世に伝えるために

―「日本で最も美しい村」連合の活動とは―

過疎化と市町村合併に起因する
地方の荒廃を止める

営まれる人々の生活によって創り出されてきた、何段もの積層に黄金色の稲穂が揺れる棚田。鏡のように空を映す小さな入り江の集落。圧倒的な迫力で見えるものの魂を揺さぶる伝統の祭り…。これらは後世に伝える必要のある、かけがえのない日本人の心のふるさとであり、財産である。

この何気ない日本の風景や文化が、近年進む過疎化や市町村合併などによって、いつしか忘れ去られ、時代の波に抗えず埋没しつつあった。

この風潮に、日本のいわゆる「過疎地」に住む人々が危機感を持ったことが、小さくても素晴らしい「地域資源」（人々の営みが造り出した美しい景観、守り続けてきた伝統文化等）を持つ村の存続、保護保全の活動を目的としたNPO法人「日本で最も美しい村」連合の誕生につながった。

フランスで起こった活動が手本に



NPO法人「日本で最も美しい村」連合事務局
美瑛町プランディングプロジェクト東京本部

● 観音太郎

1982年、フランスで起こった素朴で美しい村を厳選し紹介する「フランスで最も美しい村」活動を手本として、日本の風土に合った独自の基準の下、「失ったら二度と取り戻せない」日本の農山村の景観・文化を守る活動を2005年10月、北海道美瑛町、赤井川村、山形県大蔵村、長野県大鹿村、岐阜県白川村、徳島県上勝町、熊本県南小国町のわずか7つの町村から始めた。

この活動を通じて、自らの住む地域の魅力に気づき、輝く「オンリーワン」を持つ農山村が自らの町や村に誇りを持つことによって、本来に美しい日本の風景を次代の子供たちに残し、将来にわたって美しい地域であり続けることができる、と考えている。

設立7年目を迎えた現在、北海道から沖縄まで

全国で44の自治体と地域が加盟する組織となったが、活動全体を通じて国からの支援は受けず、議会の承認を受けた行政と、この理念に賛同する企業（サポーター企業）とが資金を出し合い、これに地域に居住する、或いは地域外に居住する個人からも応援をいただきながら、活動を進めてきた。

加盟には厳しい審査基準が

全国的な知名度が高まる中、これからも各地に裾野を広げて行きたいと考えているが、当連合に加盟したからと言って、即物的な対価をすぐに手に入られるということはない。

地域住民が連合理念を掲げるこの場所に住んで良かったと地域に誇りをもつこと、いわば「自負」が最も大切であり、「美しい村ブランド」の下での活動は全てここから始まる。

従って、連合から自治体・地域に対して加盟を

「日本で最も美しい村」連合



the most beautiful
villages
in japan

「日本で最も美しい村」連合

NPO法人「日本で最も美しい村」連合とは

近年、日本では市町村合併が進み、小さくても素晴らしい地域資源を持つ村の存続や、美しい景観の保護などが難しくなっています。私たちは、失ったら二度と取り戻せない、そんな日本の農山村の景観や環境・文化を守る活動をはじめました。「日本で最も美しい村」連合と言います。お手本にしたのは「フランスで最も美しい村」活動。いま、イタリア・ベルギーなども加入、地域文化の活性化は世界的なムーブメントになっています。

私たちは、小さくても輝くオンリーワンを持つ農山村が、自らの町や村に誇りを持って自立し、将来にわたって美しい地域であり続けるのをお手伝いします。具体的には「日本で最も美しい村」のシンボルマークを、日本のみならず世界的にも観光地や文化地域としての目印にするのが目標です。フランスでは、マークがガイドブックや地図に載るほどの、有名な活動に成長しています。

自然と人間の営みが、長い年月をかけてつくりあげた小さな、ほんとうに美しい日本は、いまだに各地に残されています。それらを感じ、楽しみ、そして、しっかりと未来に残すために、自らの地域を愛する皆さんにご協力いただきながら、2005年10月に7つの村からスタートしました。



11-B2オールポスター

お願いすることはなく、あくまでも地域住民の総意による自治体地域側からの希望があつて、初めて連合に対し「加盟申請」を行っていただくことになっている。

また、希望する自治体・地域が必ず加盟できるというのではなく、「美しい村」としてのブランドイメージを守るため、多岐にわたる厳しい審査を必ず通過しなければならない。

最初の関門としては、対象となる自治体地域が「人口が概ね1万人以下であること」「地域資源が2つ以上あること」に該当することが条件となり、

加盟申請が行われた後は、連合の資格委員である民間企業・学識経験者が実際に現地を訪れ、地域資源を始め、ヒアリング等を行い申請内容のチェックを行う。

加盟認定後も5年ごとの再審査を受け、問題点があれば除名にもつながる厳しい基準を設けていることから、この連合に加盟しているということは、高品質な景観・伝統文化を始めとする観光資源、お客様の受け入れ態勢、また、農畜産物・海産物などの物産について、継続して「美しい村ブランド」が守られていることを、44の村を訪れる

方あるいは産品を購入される皆さまに、自信を持って示せるものとなっている。

災害を受けた加盟村の復興も応援

連合としての年間の活動は、年度初めの総会、秋の新規加盟村承認セレモニーを柱に、PR活動



南木曾妻籠宿



中之条六合野反湖



美瑛ジャガイモ畑



白川郷夏



海士日の出

世界に広がる運動へ

や物産イベント等、各加盟村によるそれぞれの「美しい村づくり」のサポートが主となるが、本年度は加盟村での災害が多く、震災に見舞われた福島県飯館村、火山噴火による被害を受けた宮崎県高原町、台風による甚大な被害を出した奈良県十津川村に対し、加盟村から義援金を募って復興を応援してきた。

特に福島県飯館村に対しては、サポーター企業等と共に物心両面での援助活動を行うと共に、浜田会長（北海道美瑛町長）が直接菅野村長の元を訪れ激励、今後も継続した応援活動を約束している。

来年度の連合活動は、BSでの美しい村特集番組の製作や、青レモンの島・愛媛県上島町での定期総会、加盟の申し込みが全国から相次いで寄せられていることから、審査決定後に新規加盟セルモニーを天孫降臨の地・宮崎県高原町で開催することなどを既に決めている。

この活動の手法となったフランスを始め、世界遺産を数多く残すイタリア、のどかなワロン地方が主体のベルギー、ケベック地域主体のカナダの4カ国で構成された、『世界で最も美しい村』連合に、2010年9月、「日本で最も美しい村」連合が正式に加盟した。

現在はこの5カ国に加えて、ドイツ、ポルトガル両国の「美しい村」が加盟予定となっており、国際的な交流の輪も広がってきた。

さらに昨年8月には、お隣の韓国にも「美しい村」の組織が誕生、ネパールの民間財団から相互協力の問い合わせが来るなど、アジア地域でもこの活動が浸透し始めている。

イタリアで開催された世界連合の総会、及び韓国での設立総会にはともに日本から代表者が出席するなど、今後も世界的な活動としてさらに認知



「2011フェスティバルinあかいがわ」での集合写真

度を上げ、世界中の人々と共に運動を広げていく。自然と人間の営みが長い年月をかけてつくりあげた小さな、本当に美しい日本は、いまならまだ各地に残されている。それらを慈しみ、楽しみ、そして、しっかりと未来に残すため、国内外において一層「日本で最も美しい村」連合の活動を広げて行きたい。

【「日本で最も美しい村」連合事務局】

〒071-0292

北海道上川郡美瑛町本町4丁目6番1号 美瑛町

役場 政策調整室

seisaku_chousei@town.biei.hokkaido.jp

URL www.utsukushi-mura.jp

電話 0166-92-4330

「日本で最も美しい村」連合加盟村と認定地域資源（全44村、加盟順）

- 美瑛町（びえいちょう／北海道）：びえいの丘、美瑛軟石
- 赤井川村（あかいがわむら／北海道）：カルデラ盆地、カルデラ太鼓
- 大蔵村（おおくらむら／山形県）：四ヶ村の棚田、肘折温泉郷
- 白川村（しらかわむら／岐阜県）：萩町合掌造り集落、どぶろく祭り
- 大鹿村（おおしかむら／長野県）：大鹿歌舞伎、重要文化財（松下家、福德寺）、中央構造線断層路頭
- 上勝町（かみかつちょう／徳島県）：檜原の棚田、彩農業
- 南小国町（みなみおぐにまち／熊本県）：草原と小国杉、黒川温泉郷
- 高原町（たかはるちょう／宮崎県）：霧島連峰、狭野神楽・祓川神楽
- 木曽町（きそまち／長野県）：開田高原の木曽馬、木曽街道の伝統文化、御岳山麓の農村景観
- 標津町（しべつちょう／北海道）：鮭の文化、自然遺産ポー川史跡自然公園
- 馬瀬（まぜ／岐阜県下呂市）：馬瀬川、美輝の里
- 鶴居村（つるいむら／北海道）：タンチョウが住まう暮らし、酪農大地の景観
- 京極町（きょうごくちょう／北海道）：羊蹄山麓の農村景観、京極のふきだし湧水
- 飯豊町（いいでまち／山形県）：田園散居集落、飯豊連峰、中津川地区の里山景観と里山文化
- 中川村（なかがわむら／長野県）：陣馬形山、段丘と里山のある景観、四徳地区と四徳川の景観
- 南木曽町（なぎそまち／長野県）：中山道「妻籠宿」、桃介橋、歴史の道「与川道」
- 伊根町（いねちょう／京都府）：伊根浦舟屋群、伊根祭（亀島区祭礼行事）
- 馬路村（うまじむら／高知県）：魚梁瀬の水源森林、柚子のある景観
- 小坂町（こさかまち／秋田県）：十和田湖西湖畔の自然と歴史、産業近代化遺産群と循環型社会の融合
- 東成瀬村（ひがしなるせむら／秋田県）：田子内橋、奥羽山脈緑の回廊、仙北街道
- 昭和村（しょうわむら／群馬県）：河岸段丘と農村風景、歴史を残す家並みと横井戸
- 伊参（なかのじょうまちいさま／群馬県中之条町）：里山と木造建築の景観、お茶講
- 早川町（はやかわちょう／山梨県）：赤沢宿、奈良田集落の焼畑農業文化、雨畑硯
- 小川村（おがわむら／長野県）：北アルプスが一望できる山里風景、おやきの食文化、薬師沢石張水路群
- 池田町（いけだまち／長野県）：北アルプスの眺望と安曇野の田園里山風景、てるてる坊主のふるさと
- 曾爾村（そにむら／奈良県）：曾爾高原、曾爾の獅子舞
- 海士町（あまちょう／島根県）：小泉八雲の愛でた「菱浦湾」の景観、隠岐島前神楽
- 新庄村（しんじょうそん／岡山県）：「出雲街道新庄宿」と「がいせん桜」、毛無山
- 上島町（かみじまちょう／愛媛県）：桜の名勝「積善山」と瀬戸内海多島美景観、青レモン、法王ヶ原の松林
- 星野村（ほしのむら／福岡県八女市）：石積の棚田、星野村ブランド「星野茶」
- 小値賀町（おぢかちょう／長崎県）：野崎島と旧野首教会、西海国立公園の景観と歴史
- 綾町（あやちょう／宮崎県）：綾の照葉樹林帯、綾南川・綾北川を含めた自然景観
- 喜界町（きかいちょう／鹿児島県）：隆起サンゴの豊かな自然と農業景観、阿伝集落のサンゴの石垣
- 飯舘村（いいたてむら／福島県）：前田集落の「までい」な生活文化、飯樋ふるさと芸能
- 北塩原村（きたしおばらむら／福島県）：裏磐梯・早稲沢地区の高原野菜畑が広がる農村景観、旧米澤街道沿いに眠る歴史資源と集落文化
- 高山村（たかやまむら／長野県）：しだれ桜の古樹が広がる山里の原風景、松川溪谷、笠岳山麓の自然美、環境保全型の農村景観
- 十津川村（とつかわむら／奈良県）：谷瀬の吊橋、玉置神社の杉の巨樹群、熊野古道、小辺路の「果無集落」
- 智頭町（ちづちょう／鳥取県）：石谷家住宅を中心とする智頭宿、芦津溪谷、坂井原集落
- 多良間村（たらまそん／沖縄県）：多良間の豊年祭、生活に根ざした風水村落
- 黒松内町（くろまつないちょう／ほっかいどう）：統一感のある農村風景、天然記念物歌オブナ林
- 六合（なかのじょうまちくに／群馬県中之条町）：野反湖の環境保全型景観、自然力が育むチャップミゴケと六合の花、赤岩集落の養蚕農家群
- 東白川村（ひがししらかわむら／岐阜県）：白川茶文化、東濃ひのきの里
- 本山町（もとやまちょう／高知県）：谷の兩岸に開けた大石・吉延地区の天空の棚田、汗見川溪谷
- 塚原（ゆふしゆふいんちょうつかはら／大分県）：塚原高原の雄大な農村景観、甘酒祭り

里山自然を活かした地域活性化

～100年後の子供達に孟子の里山を残す～

もうこ

海南市は、和歌山県の北西部に位置し、海や山など豊かな自然環境を有する人口約6万人の都市である。

瀬戸内気候に属し、年間平均気温が約16度Cと四季を通して温暖な気候であることから、南部ではみかんやびわ、北部では桃の栽培が盛んなことと知られる。

市の中心街より北東に13キロ、紀の川市との境界に位置する孟子荒糸地区（通称：孟子不動谷）。此処には、谷あいを開けた水田を挟むように県

下有数の里山環境が広がっている。

里山には、絶滅危惧種も含め多種多様な昆虫や動植物の生息に適した環境が揃い、豊かな生態系が形成されていることなどから、里山環境における生態系や生物多様性の保全が近年注目を集めている。

今回は、この孟子不動谷をフィールドに里山自然や生物多様性の保全活動に取り組む「NPO法人自然回復を試みる会 ビオトープ孟子」（以下、「ビオトープ孟子」）を訪れ、理事長の北原敏秀氏にお話をうか

がった。

美しい農村風景を取り戻すために

孟子不動谷は、谷あいの奥深くに弘法大師空海が刻んだとされる不動明王を本尊とする「孟子不動院那賀寺」や、南北朝楠一党の城郭「篠ヶ城」などが点在することから、歴史・文化の宝庫としても知られる。

特に孟子不動院那賀寺は、古くから「厄除け不動」として人々の信仰を集め、かつては縁日等で賑い参詣者も多かったという。

しかし、過疎化や高齢化の進行に伴い、次第に参詣道は荒れ、道沿いには放置田が目立ち始め、これまでに地域の人々が愛し守ってきたものが失われつつあった。

この現状を見兼ねた地域の有志が、美しい孟子不動谷の農村風景を取り戻そうと、孟子不動院那賀寺前の放置田を借用し、トンボ池（水辺

ビオトープ）を掘削して、平成10年、ビオトープ孟子が発足した。

平成14年にはNPO法人として登記し、活動拠点である孟子不動谷の里山自然を保全するとともに、次世代の子供たちに財産として継承することを目的として、豊かな里山自然を活かした地域活性化に向けた取り組みがスタートした。

里山自然と生物多様性の保全

当団体は、無農薬米やそばの栽培をはじめ、間伐材によるトンボ池の保全、菊炭の製炭（クヌギ材）、里山への樹木植栽、里道ハイキングロードの整備などを通じて、水田や溜池、林地を含む里山全体を保全すること、自然回復を試みている。

中でも、谷あいの休耕田を借用して始めた無農薬米の栽培は、里山の雑木林から採取した落ち葉や、米糠、鶏糞等で醸成した有機肥料を使用しており、この持続可能な完全無農薬農法は、生物多様性の保全に大きく寄与している。

また発足以来、独自の動植物モニタリング調査を継続して実施しており、保全活動が正常に機能しているかどうか生物の角度から見た自己診断も行っている。

これらの保全活動の結果、モニタ

★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成10年2月
設立・運営主体＝特定非営利活動法人
代表者＝北原 敏秀
スタッフ＝70人
(男性45人 女性25人)

〈連絡先〉

〒640-0451
和歌山県海南市高津1082
電話 (073) 488-0712
参考HP: <http://mo-ko.jp/>



理事長の北原敏秀氏



間伐材を活用したとんぼ池



孟子不動谷の風景

リング調査では、哺乳類17種、鳥類130種、昆虫類800種、両生は虫類20種、植物類500種が確認されるまでになっており、その中には環境省や和歌山県指定のレッドリスト記載種も多数含まれているという。このことから、谷内に「水田」「水路」「溜池」「畑地」という様々な環境要素が再生されたことで、より多種多様な生物が生息できる環境となったといえるだろう。

さらに当団体は、これらの保全活動に止まらず、「里山自然観察ツアー」や「歴史探訪エコトレッキング」などのエコツアーをはじめ、米作りやそば作りなどの各種農業体験メニュー、他団体との連携イベントなども企画運営している。「型にはまった状態では何もできない。楽し

みながらやらんと！」と北原理事長は笑顔で語ってくれた。

教育現場とタイアップした環境教育

現在、ビオトープ孟子は、周辺学校の環境教育、中学生の職業体験、県職員の民間体験等の受入も行っており、県内の小中学生をはじめ、野外活動の経験の希薄な年齢層の教員達にとって、生きた教材に肌で触れることのできる環境教育の拠点としても定着している。また、和歌山県の環境学習アドバイザーとして当団体の理事3名が登録しており、県内の小中高生を対象にアドバイザー活動も継続して行っている。

平成21年には、当団体が県内の中学校とともに行っている水田生態系調査と森林性鳥類調査が、「孟子不

動谷生物多様性活性化プロジェクト」として（社）日本ユネスコ協会連盟の第1回プロジェクト未来遺産の一つに登録された。

当団体は、子供達に県外の事例調査の機会や、和歌山大学との連携による「生物多様性フォーラム」の中で、これらの研究成果を発表する舞台も用意している。北原理事長によれば、子供達のために資金を投じることは意義のある「未来投資」と捉えているとのこと。また、「地域やふるさとに対する愛着が持てる子供達になってきている」と一定の成果も認めている。学校の教科書には載っていない環境教育の分野でのニーズは年々増加傾向にあるとのことである。

当団体は、今回の未来遺産登録を期に、地元の農家やシルバー層の方々との結束をより一層固めるとともに、孟子不動谷を発信源として、地域の里山のさらなる活性化を目指すとしている。

地域の宝 100年先へ

これまでビオトープ孟子は、保全活動のみならず、その時々地域課題に対しても常に前向きに取り組んできた。これらの精力的な取り組みが評価され、平成22年には和歌山県

知事表彰、翌23年には内閣総理大臣表彰など数々の賞を受賞している。

「100年後の未来」というキーワードで里山を見た場合、孟子不動谷の美しい里山を、地域の「宝」として未来の子供達に継承していくため、地域に根差した活動を続けながらも、次の世代が生活できるような団体に育てていく必要があるという。

また、北原理事長は、今ふるさとを見つめるリーダー的人材が不足していると地域を取り巻く現状に警笛を鳴らす。「団体をつくるのは容易いが、継続していくのは並大抵のことではない。だからこそ人づくりが不可欠」と担い手育成の重要性を説く。現在、当団体は、「里山づくりは人づくり」を合言葉に、里山自然の中でリーダーを養成する塾の開講に向けて準備を進めているとのことである。

歴史・文化に裏打ちされた美しい里山や農村風景、そしてそこで営まれてきた暮らし。伝統の技や智慧を先達から学ぶとともに、さらに地域の宝に磨きをかけながら100年先の未来へと紡いでいく、それは設立当初から変わることのない当団体の永遠のミッションといえる。

まちのティールームが街づくり大学に みんなで宇都宮の魅力を再発見



異業種交流会グループSUN21事務局代表

● 吉野清史

ギョーザのまち宇都宮

宇都宮市は言わずと知れた「ギョーザのまち」である。市内中心部には多くの餃子専門店が軒を連ね、週末ともなると餃子を求める観光客で大いに賑わっている。

「平成22年 宇都宮市観光動態調査」によると、宇都宮を訪問する目的のトップは「餃子」(60・9%)であり、宇都宮市のイメージの項目では、実に96・2%の方が「餃子のまち」と回答している。

このように、すっかり定着した感のある「宇都宮＝餃子」のイメージであるが、この原点が総務省の「家計調査」にあることを知る人は少ない。この調査における「世帯当たり餃子購入額」の項目で全国第1位であったことに由来している。

つい先日、2011年の集計結果が公表され、浜松市に次いで第2位となり、15年間守り続けてきた日本

一の座から陥落することになった。しかし、これまでに築き上げてきた宇都宮の「都市イメージ」は、そう簡単に崩れることはなさそうだ。

餃子だけではない 宇都宮の魅力

宇都宮には、統計には表れない餃子以外の魅力が数多く存在する。

「ジャズ」のまち、「カクテル」のまちでもある。「ジャズ」は、世界的なジャズプレイヤーである渡辺貞夫氏の出身地であることに、また「カクテル」は全国カクテルコンテストで日本一に輝いたバーテンダーが数多く存在することに、由来する。

ジャズバーを巡る「ジャズクルージング」や、中心街にあるイベントスペースをメイン会場とする「宇都宮カクテルナイト」などのイベントも随時開催されており、多くの来場者で賑わっている。

また、街・地域の活性化と出会いの場の創出を目的として全国各地で

開催されるようになってきた「街コン」も、その原点は2004年から宇都宮で開催されている「宮コン」にあるといわれている。

宇都宮の中心街に活気を取り戻すことを目的に、飲食店の経営者が中心となり、おおむね2カ月に1回のペースで開催されており、直近の2012年5月で38回目となる。開催日になると、市内外から約3千人が中心街を訪れ、まちは活気に満ち溢れている。

新たなまちの魅力、紅茶

最近、宇都宮でにわかに注目されているのが「紅茶」である。先の総務省「家計調査」によると、「紅茶の年間消費量」は年々その順位を上げ、2008年～10年の3年間の平均値で、ついに日本一となった。「餃子」「ジャズ」「カクテル」とともに「紅茶」が宇都宮の新たな魅力として、脚光を浴び始めた。

この「紅茶のまち」には、仕掛人ともいえる人物がいる。中心市街地の商店街でティールームを経営する根本泰昌氏である。

同氏は、自分が育った宇都宮のシンボルであった中心街が疲弊していく状況を目の当たりにし、「このままでは宇都宮が衰退してしまう。中心街にかつての賑わいを取り戻したい」との想いを持っていた。

勤めていた会社を辞め、空き店舗を利用して起業家を支援する「チャレンジショップ事業」に応募。2006年に紅茶の専門店をオープンさせ、「紅茶を通じた地域の活性化」に取り組み始めた。

宇都宮の名物をモチーフにしたオリジナル紅茶や、地元に拠点を置く



街づくり大学のティールーム

プロスポーツチームのイメージに合わせたブレンド紅茶などを開発し、今では宇都宮の新たな魅力の1つとなっている。紅茶による街づくりについて根本氏は「宇都宮に、餃子だけではなく紅茶という新しい文化が芽吹いてきた。『紅茶のまち』を積極的にアピールし、これを活用することによって地域を活性化し、賑わいのあるまちを取り戻すことにつながれば…」と語っている。

宇都宮街づくり大学

同氏は、ティールームの開業以来、



ティールーム経営者 根本氏



街づくり大学講義風景

紅茶を通じた魅力あるまちづくりに向けて、様々な取り組みを実践している。その一つに、市民有志による任意団体「宇都宮街づくり大学」の設立がある。学生の条件は「宇都宮を好きであること」だけ。

肩書きは不要で、大学生、会社員、主婦、企業経営者、大学教授など、多様な学生が月に1回、キャンパスとなっているティールームに集う。講義では「宇都宮の中心部に必要なものは何か」「商店街の活性化のために何ができるか」などのテーマで、楽しくざくばらんな意見交換が繰り広げられている。

この議論の中から、具体化された事業も多い。中心商店街の清掃活動、



うつのみやヒミツめぐりツアー



中心商店街の清掃活動

「街づくり大学」であり、「宮コン」であったのかもしれない。ここで時かれた種が芽吹き、大きく育っていくことによって、いずれまち全体に波及していく。この流れがまち全体のストーリーとなって地域を活性化させ、まちを変えていくことにつながるものと確信している。

見過ごされがちな地域の歴史資源を掘り起こす「うつのみやヒミツめぐりツアー」、生産者が朝収穫したばかりの野菜が「夕市」に並ぶ街中と農村の連携企画「サンセットマルシェ」など、様々な事業が実現しており、宇都宮が持つ地域資源の掘り起こしに一役買っている。

ここでは、宇都宮のまちに対する「学生」の熱い想いが起点となり、市民主体によるまちづくりの渦が沸き起こっているのである。

熱い想いがまちを変える

総務省関東総合通信局と関東ICT推進NPO連絡協議会が、地域連携事業として開催している「わがま

ちCMコンテスト」のテーマソング「このまちが好きだから…」(詩/曲 中村正明)にこんな歌詞がある。「このまちが好きだから このまちをもっと元気にしよう! このまちをつくるストーリー! ともに語り歌おう!」

宇都宮街づくり大学の学生に求められる条件は「宇都宮を好きであること」であった。宇都宮で開催されている宮コンの原点も、飲食店の経営者達の「まちに賑わいを取り戻したい」との想いであった。

市民主体による街づくりの原点は、自分たちが住むまちに対する情熱に他ならない。まちを活性化させるためには、この歌詞にあるようにまちに対する熱い想いを持った人たちが集い、そして語り合う場所が必要なのである。

宇都宮で具現化したのが

「『道の駅』を拠点とした地域活性化」 調査研究報告書を発行

財団法人地域活性化センターでは、毎年度、地域の活性化に資するテーマを設定し、調査研究を行っています。平成23年度は、「道の駅」をテーマに調査研究を実施しました。

「道の駅」は、「休憩機能」「情報発信機能」「地域の連携機能」の3つの機能を併せ持つ施設として誕生しました。

「道の駅」の登録数は年々増加し、その認知度が高まるにつれ、地域における産業振興や地域内外の人々の交流の拠点としての機能も果たすなど、地域における「道の駅」の役割は大きく変わってきています。

本調査研究では、全国の「道の駅」の現状や課題について把握するとともに、今後「道の駅」が地域の中で果たすべき役割や方向性について検討しています。この報告書は、当センターのホームページ「地域づくり百科」(http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/7_consult/kenkyu/kenkyu.html)でも公開していますので、地域の活性化を考える方々の参考としてお役立てください。

＜過去の調査研究のテーマ＞

平成22年度 「『地域自治組織』の現状と課題 ～住民主体のまちづくり～」

平成21年度 「『空き家バンク』を活用した移住・交流促進」

平成20年度 「地域の魅力を発信するご当地検定」

通信センター



調査報告書の表紙

「アンテナショップの出店と運営」について活発な意見交換

「第4回自治体アンテナショップ情報交換会」が2月22日、地域活性化センター大会議室で開催されました。茨城県「黄門マルシェ～いばらき農園～」担当の県広報戦略室 橘川栄作室長補佐、奈良県「奈良まほろば館」担当の県東京事務所 植田薫裕副所長をお迎えし、「アンテナショップの出店と運営」について事例報告をしていただきました。



東日本大震災の風評被害払拭のため、地震発生から4カ月でショップを設立した黄門マルシェ、ゆったり構えて商売っ気がない「太仏商売」から脱却を図るため誕生した奈良まほろば館の観光戦略など、実務担当者にしき語れない貴重な話を、自治体やショップ関係者ら55名の参加者は熱心に聞き入っていました。

事例発表終了後は、山梨県とワインソムリエ田崎真也氏がコラボレーションで運営するアンテナショップ「ワインレストランYーwine」を見学し、希望者は山梨県産ワインと3種のオードブルを味わいながら、活発な意見交換を行いました。

地域づくり団体の活動をご紹介します！～新編集委員が始動～

▼情熱あふれる感動的な地域情報を、現地の顔が見えるようにお伝えしていきます。地域づくり活動の輪がさらに広がっていきますように。(平野) ▼全国で地域づくりに取り組む方々に参考となる情報をお伝えできるよう頑張ります。(松井) ▼様々な手法で「地域づくり」に取り組む方々の情報をお伝えし、皆さまの活動に少しでもお役に立てるよう頑張っていきます！(山崎) ▼地域づくりに携わる方々の生の声・活動を全国のみなさんにお届けできるよう努めていきます。成功体験はもちろんのこと、その裏に隠された苦労話なども含めてお伝えします。(下寄) ▼皆さまのニーズに合ったテーマをお届けできるよう心がけ、全国で地域活性化に取り組む活動を紹介していくことで、地域がもっと元気になるよう頑張ります！(柏木)



第16回ふるさとイベント大賞表彰式・ 平成23年度地域再生実践フォーラム開催

地域活性化センターでは、例年3月上旬に「ふるさとイベント大賞表彰式」と「地域再生実践フォーラム」を開催しています。今年度は、平成24年3月7日（水）に東京国際フォーラムにて開催し、300名を超える方に御参加いただきました。

内容は次頁から御報告いたします。



■プログラム

13:00～ 第16回ふるさとイベント大賞 表彰式

14:10～ 平成23年度地域再生実践フォーラム
【基調講演】大震災後の日本経済と地域活性化を考える
(株)日本総合研究所理事長 高橋 進 氏

15:25～ パネルディスカッション
【分科会1】エネルギーの地産地消と地域の活性化
コーディネーター NHK解説主幹 室山 哲也 氏
パネリスト 東京工業大学大学院教授 柏木 孝夫 氏
(財)日本エネルギー経済研究所特別顧問
(国際エネルギー機関(IEA)前事務局長) 田中 伸男 氏
川崎市環境局理事 牧 葉子 氏

【分科会2】持続的な観光振興による真の地域再生の実現
コーディネーター 立教大学観光学部特任教授、
(株)ツーリズムマーケティング研究所顧問 清水 慎一 氏
パネリスト 鶴雅グループ代表((株)阿寒グランドホテル)代表取締役社長) 大西 雅之 氏
(株)トラベル東北代表取締役 山口 スティーブ 氏
観光庁観光地域振興部観光地域振興課長 七條 牧生 氏

第16回ふるさとイベント大賞

「ふるさとイベント大賞」は、全国各地で開催される地域の活力を生み出すイベントを表彰し、全国に紹介することで、ふるさとイベントの開催の更なる発展を応援しています。今回は、全国から172の応募の中から「ふるさとイベント大賞選考委員会」の審査により、各賞が決定しました。

また、第16回では、東日本大震災の復興を応援するため『復興応援特別賞』を創設し、被害の大きな地域で開催されたイベントに重ねて賞を贈りました。

大賞（総務大臣表彰）



熊本暮らし人祭り みずあかり

【自治体名】 熊本県 熊本市
【主催団体】 みずあかり実行委員会
【開催回数】 第8回
【開催日】 平成23年10月8日（土）～9日（日）
【開催場所】 熊本城周辺
【観客動員数】 15万7千人

【イベント概要】

「竹」「火」「水」「ろうそく」といった熊本の資源を活かした灯りの祭典です。秋の夜、熊本城周辺に2日間で5万4千個のろうそくが灯ります。竹灯籠の制作・設営・点灯などが延べ約2千人の「市民」ボランティアの手で行われています。

優秀賞



文化文政風俗絵巻之行列

【自治体名】 長野県 南木曽町
【主催団体】 財団法人 妻籠を愛する会
【開催回数】 第44回
【開催日】 平成23年11月23日（祝日）
【開催場所】 妻籠宿重要伝統的建造物群保存地区（妻籠宿、中山道一帯）
【観客動員数】 1万人
【イベント概要】

文化文政風俗絵巻之行列、妻籠宿が栄えた文化文政の頃の格好で、住民が行う妻籠宿の雰囲気と調和したイベントです。周囲の景観、家並み、中山道、旅人、すべてに味わいのある素朴なお祭りです。

優秀賞・復興応援特別賞



～史都多賀城～万葉復興祭

【自治体名】 宮城県 多賀城市
【主催団体】 社団法人 塩釜青年会議所
【開催回数】 第1回
【開催日】 平成23年10月9日（日）
【開催場所】 特別史跡多賀城政庁跡（多賀城市市川）
【観客動員数】 2万人
【イベント概要】

「史都多賀城・万葉復興祭」は、東日本大震災で津波による甚大な被害に遭った多賀城の「鎮魂」「復興」「希望」の光と、愛する我がふるさとをテーマに、市民が手と手を携え合いながらつくりあげた事業です。

第16回ふるさとイベント大賞

奨励賞



むらかみ宵の竹灯籠まつり

【自治体名】新潟県 村上市
【主催団体】チーム黒塀プロジェクト、竹灯籠まつり実行委員会
【開催回数】第10回
【開催日】平成23年10月8日(土)～9日(日)
【開催場所】黒塀の通り(村上市小町、寺町)
【観客動員数】1万人
【イベント概要】

城下町の風情を色濃く残す黒塀の小路で、7千本もの竹灯籠に灯が灯る幻想的な雰囲気の中、お寺、古民家、割烹の座敷などの会場で、琴や尺八、フルート、和太鼓などの演奏が行われる。古典の音色と幽玄の灯りの幻想的なお祭りです。

奨励賞・復興応援特別賞



写真提供：ふくしま絆新聞

復興なみえ町十日市祭

【自治体名】福島県 浪江町
【主催団体】復興なみえ町十日市祭運営委員会
【開催日】平成23年11月5日(土)～6日(日)
【開催場所】福島県二本松市 二本松駅周辺ほか
※通常は、浪江町で開催
【観客動員数】3万人
【イベント概要】

「十日市祭」は福島県浪江町に明治時代から続く伝統的なお祭りです。平成23年度は、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故により、全町民が町外への避難を余儀なくされている中、町民の「絆」を大切にしようと「復興なみえ町十日市祭」として避難先の福島県二本松市で開催しました。

選考委員特別賞



横浜 JAZZ PROMENADE

【自治体名】神奈川県 横浜市
【主催団体】横浜JAZZ PROMENADE実行委員会
【開催回数】第19回
【開催日】平成23年10月8日(土)～9日(日)
【開催場所】みなとみらい、桜木町、関内、元町・中華街エリアほか市内各所
【観客動員数】12万6千人
【イベント概要】

日本ジャズのふるさとである「横浜」の地で、港町らしい進取の精神の下、歴史・文化・ロケーション等を総合的に生かしたフェスティバルとして横浜の秋の「風物詩」に定着し、毎回10万人を超えるお客様が訪れます。

奨励賞



南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ2011

【自治体名】富山県 南砺市
【主催団体】南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ実行委員会
【開催回数】第6回
【開催日】平成23年8月18日(木)～30日(火)
【開催場所】南砺市 井波別院瑞泉寺境内
【観客動員数】4万4千人
【イベント概要】

「南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ」は、「木彫りを通して世界をつなぐ」をテーマに国内外の招待作家と地元の木彫刻家が野外で公開制作を行い、完成後の作品を市内に展示する国際交流イベントです。

日本再生の担い手は地方に存在 ～高橋日本総研理事長が基調講演～

第16回ふるさとイベント大賞表彰式に続き、同会場にて平成23年度地域再生実践フォーラムが開催された。

地域活性化センターでは同年度中に、地域再生を担う人材の育成を目的として地域再生の方法について、様々な視点から考えるワークショップ「地域再生実践塾」を今年度も全国5か所の事例地で開催した。

その締めくくりとして、「地域再生実践フォーラム」を開催し、320人の参加を得て新たな視点や手法の導入等による地域の再生、持続可能な地域づくりを目指し、地域活性化に向けた実践的エッセンスを広く発信した。

「地域の活性化へ域外からヒト・モノ・カネを取り込め」——高橋氏

はじめに、株式会社日本総合研究所理事長の高橋進氏が「大震災後の

日本経済と地域活性化を考える」と題して基調講演を行った。

高橋氏は、昨年3月11日に発生した東日本大震災から1年が経過し、復興に向けた様々な取り組みが行われるなかで、大震災が日本経済と地域経済に及ぼした影響と、明らかになった弱みを検証し日本経済の展望を示すとともに、日本経済の再生と、地域を活性化するための新たな方策について提示した。

まず東日本大震災により、産業の空洞化、電力供給の不足、財政破綻リスクという日本経済の成長を制約する3つの要因が鮮明になるとともに、地域経済は中央依存・大企業依存の限界から、ヒト、モノ、カネの流出が続き縮小均衡の危機に直面している現状を述べた。

そしてこの状況から、地方経済圏については、これまでの成長モデルを見直す契機とし、これまでの企業

誘致や公共事業への依存からの脱却を図るべきだとした。その上で、地域が持続的に発展していくために、世界も視野におきながら各地域の特性に合わせて観光やものづくり、感性・文化関連などの産業を振興し、域外からヒト、モノ、カネを取り込むことの必要性を説いた。

東日本大震災の被災地については、復旧ではなく「新興」に取り組み、いち早く特区制度の活用など地方分権を進め、再生可能エネルギーや防災拠点の先進地となることで、日本全体の産業活性化や地域再生が東北から始まる可能性を示した。

最後に、「これからは国単位で物事を進めるのではなく、各地域の特性を活かして物事を進めていく必要がある。日本再生の新たな担い手は地方に存在している。彼らの潜在力を引き出し、グローバル化させることで地域経済が活性化するとともに、日本全体の再生の姿もみえてくる」と締めくくった。

基調講演に続き、「再生可能エネルギー」と「観光振興」の視点から地域活性化に結び付ける手法について議論する

2つの分科会が開催された。

○分科会Ⅰ「エネルギーの地産地消と地域の活性化」について議論

コーディネーターにNHK解説主幹の室山哲也氏を迎え、パネリストとして東京工業大学大学院教授の柏木孝夫氏、(財)日本エネルギー経済研究所特別顧問(国際エネルギー機関(IEA)前事務局長)の田中伸男氏、川崎市環境局理事の牧葉子氏が登壇した。

東日本大震災及び福島原発事故が



基調講演



分科会 1



分科会 2

残した課題や、明らかになった地域社会の弱みを、日本を取り巻く国際的なエネルギー情勢なども触れつつ整理しながら、日本らしい再生可能エネルギーの方向性や今後の地域社会のあり方について、それぞれの立場から活発な議論が交わされた。

柏木氏と田中氏は、エネルギーの安定供給の観点から、エネルギー供給源の多様化を図るとともに、各エネルギーの特性を活かして効率的かつ効果的に組み合わせ、目的に合ったエネルギーを選択して利用するべ

ストミックスの確保について述べた。牧氏は、行政の視点から「エネルギーの地域主権」の必要性について語った。

パネルディスカッションを通じて「多様性」と「選択性」という2つのポイントがクロージアアップされた。また、再生可能エネルギーを活用した新しいビジネスモデル構築の必要性について語られた。

最後に室山氏は、「今回の震災や原発事故を契機に、日本人はエネルギーと地域とのつながりについて改

めて考え始めている。そういう意味で、大変不幸な出来事であったが、今回の経験をテコにして次のフェーズ（段階）に進むべきである。そのためには『イエスカノーか』という二分法ではなく、その間にあるリアリズムを大切にしながら、前進していくためのシナリオがいま求められているのではないかと締めくくった。

○分科会2「持続的な観光振興による地域再生」への課題探る

コーディネーターに立教大学

観光学部特任教授（株）ソーリス・ムマケティン・グ研究所顧問）の清水慎一氏を迎え、パネリストとして鶴雅グループ代表（株）阿寒グランドホテル代表取締役社長）の大西雅之氏、（株）トラベル東北代表取締役の山口ステイブ氏、観光庁観光地域振

興部観光地域振興課長の七條牧生氏が登壇した。

持続的な観光振興を進めていくための課題と留意点について、人材・組織・資金・行政の役割という視点から実践事例を交えながら議論が交わされた。

大西氏は、阿寒における「アイヌ文化の里構想」を核とした自身の取り組みを踏まえて強い信念を持ったリーダーの必要性を力説した。また山口氏は、東北地方の豊富な地域資源の活用と広く人材を登用することにも補助金に頼らない着地型の観光地域づくりを、七條氏は、熊本県阿蘇地域の若手3名から始まった地域再生の事例を基に「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりについて、それぞれ語った。

最後に清水氏は、「人口減少時代を迎えた今日、高度経済成長期に通用した行政の観光課や観光協会と大手旅行会社が主導する従来型観光の限界が明確になった。一方で、『人に来てもらい、まちを元気にしたい』という地域の思いはますます強くなっている。それを具現化するための新しい観光振興のあり方を定めることは喫緊の課題となっており、個々の地域の実情に応じた速やかな対応が求められる」と締めくくった。



秋田市長 ● 穂積 志

「こでらえねえまち」を目指して

東北地方から関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらし、多くの尊い命が失われた東日本大震災から早くも1年が経過いたしました。

改めて犠牲となられた皆様のご冥福を心からお祈り申し上げますとともに、被災された皆様にこの場を借りてお見舞い申し上げます。

本市では、震災による直接的な被害が少なかったことから、地震発生当日の緊急消防援助隊派遣を手始めに、医療・給水活動や避難所の運営、仮設住宅の建設、救済物資の提供といった被災地支援を行うとともに、被災された皆様の勇気づけるため、竿燈まつりへの招待や被災地での竿燈披露なども行ってきたところであります。

また、私自身も昨年5月に被災地を訪問した折に、想像をはるかに超える惨状を目の当たりにし、復興への道のりは果てしなく長いと痛切に感じてまいりました。現在、岩手県の災害廃棄物についても、受け入れに向けて鋭意検討を進めているところではありますが、同じ東北の一員として、今後も可能な限りの支援と協力をしてまいりたいと考えております。

さて、本市では「ともにつくり ともに生きる 人・まち・くらし」を目指すべき将来像とする新たな総合計画「県都『あきた』成長プラン」が、昨年4月からスタートいたしました。このプランは、元氣な秋田市を創造するとともに、元氣を支える基盤づくりに向けて、本市の地域特性や人的・物的資源などを最大限活用する「成長戦略」を新たに設定したことが最大の特徴となっております。「都市イメージ『ブランドあきた』の確立」をはじめとする6つの成長戦略に予算や人員などを一体的かつ集中的に投入し、重点的に取り組んでいるところでありますので、そのいくつかをご紹介します。

震災後の電力不足などもあり、エネルギー政策の見直しを余儀なくされている中、本市では、太陽光や風力、バイオマスなどの自然エネルギーの市内施設への導入や

IT技術の高度利用などにより、エネルギーを最適なバランスで使い、併せて、民間企業と一緒に取り組みを進めることで地域経済の活性化へも結びつける「あきたスマートシティ・プロジェクト」を推進しております。

その一環として、市有施設における効果的なエネルギー管理を行うため、昨年度構築した情報統合管理基盤の運用をこの4月から開始したところでありますが、今後は、被災された自治体にもこの基盤システムを利用していただくことにより、エネルギー管理というこれまでにない形で復興を支援してまいりたいと考えております。また、省エネや温室効果ガスの削減とともに、町内会の経済的負担の軽減を図るため、市内の2万8千灯を超える町内防犯灯を全てLED化することとしております。

さらに、全国で最も高齢化が進んでいる本県にあって、本市におきましても、すでに4人に1人が65歳以上の高齢者となっております。このような中、本市は、WHOが提唱するエイジフレンドリーシティ（高齢者にやさしい都市）を目指しており、昨年、国内の都市で初めてWHOのエイジフレンドリーシティ・グローバルネットワークに参加いたしました。

今年度から、行動計画の策定に着手することとしており、我が国が世界でも例を見ない超高齢社会に突入する中、高齢化をプラスにとらえた新たな都市モデルを構築してまいりたいと考えております。

今回の震災では、絆の大切さも改めて浮き彫りとなりました。安全・安心に暮らせることはもちろん、老若男女すべての市民が互いにつながりを感じられるあたたかいまち、故郷として誇りと愛着を持てるまち、そして、日々のくらしの中で一つでも多く「こでらえねえ（秋田弁でたまらなく良いの意）」と感じていただけるような、元氣な秋田市を目指してまいります。

岡山は、名所と絶景が

てんこ盛り!!

庭園をくまなく
巡りたい!

お茶しながら
眺めていたい!

日本三名園のひとつ 岡山後楽園

岡山城

気軽にける
旅がいい!

いろいろ巡る
旅がいい!

瀬戸大橋

旅情が
ある!

倉敷美観地区

夜の
白壁が
いい!

日本最古の庶民学校
特別史跡旧閑合学校

歴史を
感じるの
がいい!

蒜山高原

すがすがしい!

見ごたえ
たっぷり!

ほの
ほの!

吉備津神社

驚きの
回廊!

晴れらんまん。岡山の旅

岡山の正しい
観光情報 お得な特典情報

あなたの知らない岡山の観光情報がきっとみつかる!
おかやま旅ネット

おかやま旅ネット
<http://www.okayama-kanko.jp/>



いいもの、いいこと、いいひと、 いいまち、長浜市



■黒壁スクエア 豪商の邸宅や蔵を改装したガラス工房や飲食店などが立ち並ぶお洒落なエリア

長浜市は、滋賀県の北東部に位置し、京阪神や東海、北陸の結節点として各地域から約1時間。琵琶湖から標高1,000mを超える伊吹山系の山々まで地形の変化に富み、四季を通じて自然の息吹がいきいきと感じられる美しく、豊かなまちです。

また、全国的にも有名な「黒壁」や歴史的な街並み、古くから守り伝承されてきた観音信仰など、不易と流行が織り成す文化性の高いまちでもあります。

しかし、何と言っても当市は、「戦国の聖地（ふるさと）」です。織田信長や豊臣秀吉、徳川家康の戦国の三英傑をはじめ、石田三成や柴田勝家、浅井三姉妹やその父・浅井長政など、戦国時代を代表する者たちが数々のドラマを繰り広げた北近江・長浜。「近江を制する者が、天下を制す」とまで言われ、日本の歴史の檣舞台となった当市には、小谷城跡や賤ヶ岳・姉川の古戦場をはじめ、今なお当時の名残をとどめる名所・史跡が数多く点在しています。歴史的、文化的資産と出会うまち・長浜にぜひお越しください。



■長浜・戦国大河ふるさと博は、12月2日まで開催中



■曳山まつり 4月9日～17日、曳山の舞台で行う子ども歌舞伎は、国の重要無形民俗文化財



■ビワマス 琵琶湖だけに生息する魚。味はくせがなく、トロ以上と言われ、上品な甘味のある脂がのっている



■小谷城跡 戦国武将・浅井長政の居城。信長の妹・お市の方ゆかりの城。難攻不落の名城の名残あり



■竹生島 琵琶湖の北部に浮かぶ信仰の島。国宝の宝厳寺、都久夫須麻神社は必見



■観音信仰 戦国乱世を村人が守り抜いた観音像は、国県市の指定文化財だけでも約50体（重要文化財：赤後寺）

★日本橋プラザビルイベントスペース

4月

- 4月17日（火）
藤岡市（群馬県）
『藤岡市観光物産キャンペーン』
- 4月24日（火）～25日（水）
富士宮市観光協会（静岡県）
『表富士ふじのみや観光物産展』
- 4月26日（木）～27日（金）
大野市（福井県）
『越前おおの 名水楽座』

5月

- 5月1日（火）～2日（水）
鴻巣市（埼玉県）
『「花のまち こうのす」鴻巣物産市』
- 5月10日（木）～11日（金）
御前崎市観光協会（静岡県）
『夏だ！海だ！おいでよ 御前崎へ』
- 5月17日（木）～18日（金）
かみのやまの観光と物産展実行委員会（山形県）
『温泉街かみのやまの名産・特産市』
- 5月22日（火）～23日（水）
山口県（山口県）
『おいでませ山口館10周年記念フェア』



(写真)

- 1 2月2～3日ベリーHOT・HOTな真岡（もおか）の観光物産展（栃木県）
- 2 2月6～7日豊川市観光物産展（愛知県）
- 3 2月8日おいでませ山口館 来館者100万人達成記念イベント（山口県）
- 4 2月10日落花生の郷やちまた物産展（千葉県）
- 5 2月15～17日能登七尾特産品フェア～食と心のおもてなし～（石川県）

【編集後記】

▼「日本で最も美しい村」連合が2005年秋に活動を始めて以来、7年目を迎えます。過疎化や少子高齢化などに悩む農山村が、自らの町や村が持つ魅力を再認識し、自然や景観の保全活動などに取り組みむのが目的です。そのお手本は、30年も前にフランスで起こった、素朴で美しい村を厳選し紹介する「フランスで最も美しい村」活動だそうです。

▼4月号の特集は、この「日本で最も美しい村」の取り組みに着目し、まちづくりのヒントを探りました。連合に加盟する自治体は当初、7町村でしたが、現在では北海道から沖縄まで44の自治体と地域が加盟する組織となっています。今回はこのうちの12事例を紹介しました。他の町村については、35ページの「連合加盟村と認定地域資源」をご覧ください、それぞれの地域の魅力を探っていただければ幸いです。

▼加盟には厳しい審査基準がありますが、活動を通じて固有の地域資源を持つ町村がふるさとに誇りを持ち、ブランドイメージを守る取り組みが続いています。その結果、交流人口の増加や田舎暮らしブームを背景に都会からの移住者増につながったなどの報告もあります。佐藤誠北大教授の基調論文、連合事務局の解説記事を併せ、国際的にも広がりを見せる「美しい村」連合の活動の狙いがよく分かります。

▼今月号から、弊誌で表記する年号などの数字を従来の漢数字から原則として算用数字に変更しました。表記変更とともに、読者の声に応えた誌面の充実にも努めてまいります。（原田）

「5月号予告」

特集Ⅱ「自治会・町内会の活性化」(仮)

地域づくり4月号

2012年4月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131 (代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えします。地域づくり情報課（03-5202-6138）まで、ご連絡下さい。

宝くじは、
地方自治体の公共事業等に
幅広く使われています。

NEW!

ワクワク、
続々。



宝くじの収益金は、
病院や検診車、図書館や動物園、
災害に強い街づくり、
緑あふれる公園、美術館など、
皆様の暮らしに役立てられています。